

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年六月二十五日 印刷
昭和四十四年七月一日発行 (毎月一日発行)
(第四十六号)

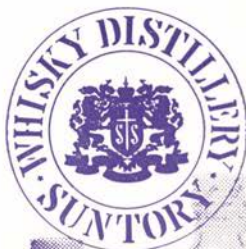


No. 46

集特 ・ 路郎先生のこの一句、

七月号

世界の通が憧れる……



国際銘柄

サントリ

■インベリアル・ローヤル・オールド・角瓶
カスターム・ゴールド・ホワイト・レッド

川柳塔社主催

路郎忌句会

七月七日(月)午後六時

会場 以和貴荘

阿倍野区松崎町二丁目

電話 622・1275番

柳話

中島生々庵

兼題

「寝転ぶ」

若本多久志選

「雀」

川村好郎選

「浄土」

西尾桀選

「一と握り」

北川春巢選

席題 (題と選者は当日発表)

会費 二百円

★★ 投句だけの方は郵券五十円封入
電話での投句や句の訂正はご遠慮願います

★ 8月の題「カーテン」「出世」「他人」「伝説」

のど仏とんがらかして明治調

すっぱんの首が生きてた鼻の穴

長寿法きけば寝酒にチョコ一つ

道頓堀どぶ鼠にも生きる道

石仏の面やつれした無抵抗

中島生々庵

今月のことば

オリンピックの記録はほとんど極限に達している、今後この極限を破るためには身体のある部分が不具にも近い程異常に発達したところがなければならぬ。元来運動が十分出来るためにとる食物であるのに食物を消化するために運動をする、または記録を上げるために減食するなどというのは主客顛倒である。ましてや記録とは勝敗の面白味以外には無意味であり、特別に運動のための運動は必要なしである——こうした意見がある。この論を拡大してゆくとスポーツが記録を競う事は馬

鹿げたことであるとの記録否定論であり、ある程度筋の通った議論でもある。しかし私はそうは思わない。勿論スポーツだけでなく記録争いにのみこだわるのが誤りであることは明かである。はっきりさせておかねばならぬ事は同好の集団に参加して技を競い、技を磨く方法を考え合うところに単に参加するだけよりも数段高い意義があることに気付かねばならぬ。忙しい生活の中から出席して苦吟する句会の意義は参加しないと味わえぬ醍醐味であるということである。



第八回青玲社展・あかつき

中島蓬太郎

川柳塔七月号

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

めぐりくる路郎忌……………後藤梅志……………(2)

川柳日記……………麻生葭乃……………(27)

川柳初篇研究……………(七十三)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

二賞中間発表……………(42)

秀句鑑賞……………清水白柳……………(30)

緑内障……………高鷺亜鈍……………(27)

葉柳及び緑亭川柳……………岡田甫……………(41)

梅蘭芳の髭……………(大陸巷談)……………東野大八……………(28)

私論・柳論

めぐりくる

路郎忌

私の庭には、イチジクの大木があり、それが五月から七月にかけて、青々とした葉が繁る。引越してから三十年、毎年かわることはない。こうして路郎忌は、めぐりくる。体内の血汐が芽ぶく思いがするのである。

かつての川雑当時、路郎門の編集部で苦案を共にしたのは、一三夫、薫風、一瓢、宏子、私は川柳塔の清記を担当した。誤字・当て字は印刷屋へ回わさない主義で、

川柳徳川記……(六)……富士野鞍馬……(44)

雅号ぶつちやけばなし……谷沢好祐……(64)

路郎先生のこの一句……(22)

特別寄稿 麻生葭乃・右城暮石

北川春巢・八木摩天郎・若柳潮花
橘高薫風・山川阿茶・高橋操子

同人特集

近作柳樽……菊沢小松園選……(32)

初步教室……本田恵二郎……(50)

大萬川柳「野良犬」……清水白柳選……(52)

★柳界展望……(薫風)……(54)

★本社六月句会……(庸佑)……(56)

★各地柳壇……(文秋)……(59)

「虚栄」……出原真奇選……(48)

一路集「ハンケチ」……西出一栄選……(48)

「石鹼」……弘津柳慶選……(49)

★編集後記……(二三夫)……(65)

楽な仕事ではなかった。

それらの人々を温く、労わって
下さったのが葭乃奥さんである。

どうして忘れることが出来ようか
イチジクからしたり落ちる樹え
きのような思いがするのである。

葭乃奥様はまだお達者

相談をしてひとしなをばよく膳

葭乃

生駒本町二ノ一〇三・ややこし
い所に静居をもたれた奥様は、ひ
たすら俗塵から遠ざかろうとして
おられるようだが、我々は忘恩の
徒とはなりたくない。川柳の勉強
より優先するもの。それは、人の
道を行なう事。何としても、慰め
て上げたい。

(後藤梅志)



中島生々庵選

東大阪市 久米奈良子

鳥取砂丘三句

自戒する夜はひたすら墨をすり
従いて行く心変わりをもう責めず
人形師時代を悟る眉も引き
夜の河透かせばやはり流れてた
新葉も煎菜ものみ懷妒抱く

大阪市 山川阿茶

子と来れば砂丘隅まで砂の山
三人の子と玄奘のごと行く砂丘
風紋に電気に似たるもの走る
潮干狩竿突っ立てて帽子掛
恩師の忌小舟漂うばかりなり

大阪市 正木水客

七十二回目の誕生日

越前平泉寺(四句)

誕生日産湯の気持朝の風呂
ようもったもんやと思う誕生日
一夜づけと云う顔もせず座談会
一本だけ待っててくれた八重ざくら
母一人子一人別居を云い出せず

菩提林杉は緑りを吹きあげる
六千坊の礎石苔の囁き聞いている
苔かぎりなく野放途ともみえ光る
栄枯盛衰なめつくして苔黙す

大阪市 橋高薫風

大津円満院

滝の軸応挙は滝の音えがく

青森市 工藤 甲吉

パンタロンひらりひらりと春の風
書けといわれると辞表は意地になり

十万石城下「弘前」支社長発令

殿様の気持ちがかかる天守閣

貴子・雅子生まれ孫四人となる

臍の緒を二ついたたくめでたさよ

斉唱となる産ぶ声のにぎやかさ

倉敷市 本田 恵二朗

老来とみに妻の権威が判りかけ

幼稚園知恵一つふえ二つふえ

驚の初音拾うたハイキング

ここに来て飲めと桜が言いました

そのわけを知ってるくせに聞きたがり

高槻市 傍島 静馬

方便の嘘が善人惑わせる

以心伝心入れちがいに来た便り

クルマ事故何んぼもろたと見舞われる

敬遠の上座とワンマン気が付かず

乳母車に無視されている歩道橋

大阪市 本多 柳志

野良犬の車道横切る知恵をもち

春斗に勝って物価に追い越され
実力でした栄進をあなどられ

八幡律寺吟行

僧正の腰かくしゃくと紅葉寺

信心とは別に簡めしの味

豊中市 戸田 古方

とにかくも心ブラのひと暮れ六時

孫のピアノへありったけの手を拍き

五風十雨空半分が雲になり

留守番が自分のための湯を沸かす

赤ん坊まるまるおしめかえさせる

岡山市 浜田 久米雄

とっときの言葉を出してちとどもり

きっぱりと別れた筈が言い寄られ

きょうだけの命を明日へつないどり

種屋から買わないですむ種を時き

これしきの遺産が誰に配られる

大阪市 後藤 梅志

禅に発ス川柳の妙味ハ円転滑脱

サイケ調 原色えのぐ あたま混乱

西欧

六月が晩秋だとさオーストリア人

配給米

ナニオクソマケルナ負ければお陀仏だ

退院記

単純な真理　馬鹿になれ　バカになれ

大阪市　不二田　一三夫

利用価値“と金”のような役でいる

交替に手をつつこんでポップコーン

第二場の恋は暗転早やすぎる

寄席(二句)

そこに芸人がいた——“ハハス”を胸に抱き

芸人の不遇　知らぬまに死んでいた

笠岡市　木　山　遠　二

薬風呂で世間離れのした話

人ざわりよく適当な嘘も云い

山椒をもらい笥買いに行き

愛鳥週間

百姓は雀を愛す気にならず

鳥取市　藤　本　礎　山

今日の義務果す机を先ず清め

泣き虫のあの娘がミニの勇気もち

御主人の婿になるとは知らず吠え

喪服よく似合う妻なり死んだるか

岡山県　直原七面山

酔えば法螺吹く人で平

鯛の値も聞いて全快間近なり

休ませるように日曜雨が降り

生きとし生けるもの

太陽に向ってものみな手を上げ

大阪市　西　出　一　栄

春や春うちの孫まで美女に見え

花の下一つ覚えの炭坑節

太閤も兜を脱いだ孫の守

おぼろ月夜光源氏が出て来そう

岡山県　藤　原　秋　月

踏み台にされていたのを今　気づき

ホフマン方式途中で死ぬるかも知れず

断水の蛇口をいっぱい開けて待ち

行商へ値切れぬほどの暑さなり

ハワイ　築　山　快　夢　起

貸した本行衛不明でそれっきり

上院の花形彼も移民の子

名刺にも元の肩書捨てきれず

冥土への覚悟も出来て年を越し

松江市　舟　木　与　根　一

東海の旅

五力国はかすんだ十国峠越し

天下の險ガイドの唄で越していき

富士見えぬ日本平で喰うただけ

玉露を買って静岡の族終る

京都市 都倉求女

清掃局昭和元禄もて余し

五月晴れ物干竿も軽い音

問いつめてからの話に同情し

これしきの花壇に蜂は物足らず

鳥取市 河村日満

従兄を葬う(二句)

酒のない国へなにしに行く旅ぞ

親族代表次の選挙も意識して

菜の花が通せんぼする道いそぐ

四月二十五日わが家交通事故に遭う

いねむりに家まで持ってゆかれたり

高槻市 若柳潮花

かみそりを逃れた髭を爪で抜き

より添うた影へもつれて来る柳

水音を残して笛の音がとまり

水まいて仲居は宵の灯を入れる

連休(三句)

先ず腹の立つ 連休 休めない

国道の車 日本を珠数つなぎ

仇討のように連休駆け廻り

奥さんになって素顔のお出迎え

大阪市 木村水洞

天と地の恵み朝顔芽を揃え

童貞を捧げた妻に侮どられ

浮気せぬだけがとりえのうちのひと

なつかしの唄歌手も老い僕も老い

岸和田市 内藤きさ子

五月晴れなのに物憂い袖だたみ

気心がわかりぼつぼつこんな無理

捨てかねたつつじだまって咲いてくれ

連休はおわりましたと夜の雨

竹原市 小島蘭幸

本人が小首かしげるほど好調

嬉しさは隠せぬものと知る無口

ミスもよし教えてくれるものがあり

イヤホン朝まで鳴っていたラジオ

伊丹市 小川静観堂

出雲市 尼 緑之助

この庭へ石仏一つ　どやろうか

野鳥よんで一ン日あそぶ空と庭

さわやかな真昼のゆめに句碑が建ち

初恋と言えなくもない仲だった

香川県　三井　酔　夢

幸せはトレパンはいたわらび取り

嫌われた鴉に青い空があり

断崖に転落寸前（一句）

スリップの怖さが道いましめる

満月が冷戦中の愚を照らし

大阪市　石　倉　旅　風

仕込まれて釣られ上手な池の鮎

池の鮎釣られてやった口をあけ

死生観　手さぐりながらひとりで旅

ニコツともツンともせず座り込み

明石市　阿　万　万　的

秘境白山中宮から杉山鉱泉へ

苔と石の艶　白山へつづく道

茅葺きの宿　旅好きを喜ばせ

山の線はつきり朝が来る光り

茶のうまさ山宿の朝匂うて来

名古屋市　吉　田　水　車

置くところへ置けば悪筆も生き

明治村所見

明治村我にかえればバスの塵

西郷侯爵邸

まぼろしは消えて土足の我を見し

六連隊兵舎

血涙秘めし若人幾万

倉敷市　木　村　千　容

路端のお地藏尊にハツとする

老残へ一辺倒の老妻があり

勝つことが師恩に酬ゆる道という

芽の動きみつめてすでに初夏にいる

大阪市　児　島　与　呂　志

叱るのが居無けりや頼りないらしい

馬鹿話通じる娘で氣を使い

一人氣むずかしく二人は笑う娘達

しゃくやくの水上げ知ったかぶりの妻

藤井寺市　西　い　わ　を

散る時があるので花の美しく

初咲きのバラに添木をして眺め

斗病へ肥り出したに氣を良くし

手の届くところまで拭いたガラス拭き

京都府 大 鶴 喜 由

恋愛中ばかり雇うて社が細そり

産む積りで産んだのでないとも云えず

鯉のぼりひつつき合うて風を待ち

時代ずれかいなで子供のさばらせ

大阪府 金 井 文 秋

おじいちゃん若い若いと喜ばせ

スピッツの方はソプラノで吠え

マネキンの美貌で着てる柄が売れ

はしご酒妻より娘の眼恐くなり

諫早市 川 岡 靈 眼 子

眼鏡橋ボスを抱いて撮される

遠来の人に親しきチョコの数

急しい出立

宿り木をはねて飛び立つ羽根の音

長崎の女

ケロイド顔に視線も馴れて老い

岡山県 横 山 一 声

長男銀行へ就職

一円があわず終列車におくれ

シャッターをおろして銀行鉢巻し

日曜日せめて忘れよう金の事

お守りは交通安全ばかり売れ

倉敷市 小 幡 里 風

一本にしなければ義理がからみつき

貝殻と話して見たい日の無聊

云い難いこと云うて停年もう間近

実印をあっさり押させて来た話術

ハワイ 上 田 紅 溪

満月が窓からベイドのぞき込み

一日主義明日の事まで気に留めず

遺言状出来て日本へ墓詣り

ヒッピー族南洋諸島が住みよかる

宝塚市 小 畠 無 聖

さわやかに死なしてほしいも欲であり

湯吞まで押し戴いて今日生きる

はんものが出て温室は値が下り

連休へ父娘三人ペンを持ち

倉敷市 野 田 素 身 郎

連休の出費へ残業いとわな

恋人がいれば代直などはせず

盲の父に話しかけてる子の笑窪

栄転の重荷に堪えている背広

芦屋市 丸 川 初 甫

停年の垢を落しに妻と旅

つくばいの水で木賊がよく育ち

ゆっくりと眼鏡をはずすむしタオル

今日だけの花見のように人の山

京都市 松川杜的

北越の秘境「平泉寺」にて

もったいない心で経文のある石畳

老杉に区切られ五月の青い空

山の湯「杉山鉱泉」にて

満月の吸い込まれそうに山の宿

山菜を数えて楽し山の宿

倉吉市 奥谷弘朗

産んだ子でない悲しさの解る顔

ささやかな暮し日溜りへ移す鉢

とばかりが係長まで来て止り

女房のハミング今日は給料日

笠岡市 松本忠三

勉強もせずに頭へきたと言ひ

運賃の値上げが故郷を疎遠にし

咳をする間剃刀待ってくれ

今拭いた廊下を通る初巡視

愛媛県 村上旭童

ひとねむりしてから長いながい夜

食べられる運命乳牛の雄生れ

今日も働く朝の茶柱

長湯など出来るか酒の燭がまち

堺市 新谷笑痴

税務署が見つけて呉れた社の黒字

極楽へ順番狂わす記事となり

黙ってる妻も流行知って居り

大阪市 福井多蘭子

塔婆書けば人の心がしみじみと

呼び出しへ老友病を得たらしく

尼若し墨衣に光る腕時計

大阪市 市場没食子

媒酌をする(一句)

媒酌人としてレデメードの挨拶し

未亡人生きる小細工にも疲れ

湯気遠く近くかすんだ中に裸婦

門真市 福島鉄児

酔えばすぐ妻の悪口云いたがり

娘の瞳信じて噂信じまい

ホステスの偽装の中にあるやつれ

下関市 桜川不水

二日酔の孤愁に耐える朝の汁

窓と窓パントマイムはマルを出し
君もかと或る妙薬を笑い合い

竹原市 山内静水

喰うための受講定年言うといれず

老眼鏡忘れた事にして読まず

公私混同あきれるほど喋る

広島県 高橋鬼焼

鯉轡平和な風がものたらず

母と子の息で風船丸くなり

愚かなる決意をさせた易者の灯

守口市 羽原静歩

夜桜へケセラセラの顔が寄り

霊園もズバリお金が物を言い

落葉踏む足音だけが僕のもの

岸和田市 葛城伊三郎

一匹の蚊にささやかれ寝もやらず

唯我独尊もうあれこれと思うまじ

すっぱんがバッグに見えた月夜の道

笠岡市 木山要次

頂点のありそうもなき坂を攀ず

プライドに触れる話に巻き込まれ

命から二番目着ずにまたたたみ

平田市 久家代仕男

平凡な日日は硯の水が切れ

熱帯魚イミテーションの藻をくぐり

子沢山白髪抜く子に肩もむ子

大阪市 川口弘生

伯父、小林善助永眠

見舞うたら帰りを案じる人でした

友引の一日てれてるような遺影

分骨も冗談のように云い残し

岡山市 川端柳子

だまされる笑顔も母は持ち合わせ

ふるさとに折目ただしい四季があり

母になりきって夫を忘れかけ

和歌山市 野村太茂津

受付けにテストをされて取り継がれ

借金の話に触れず酔うた振り

ほんとうの空気の味よ山若葉

岡山市 田村藤波

なよ竹のように娘の丈が伸び

雨の日の土方が手伝う手内職

民族の戦い宿命とは悲し

大阪市 宮尾 あいき

出雲市 弘津 柳慶

落ちてふまれて果てる運命の落椿

御見舞に来て病人にぐち聞かせ

病棟に郷愁そそる花匂う

倉敷市 水粉 千翁

ふり向いて女比べる顔となり

満ち足りた笑顔で未来だけ語り

身に覚えあることばかり笑えない

高石市 谷 沢 好 祐

満員で出で満員で帰って来た連休

花済んだ後の肥料は忘れられ

元禄ともいわれ戦国とも言われ

鳥取県 清水 一 保

琴 平

石段の数で御利益まで上り

土佐高知にて

銅像の竜馬も見降す桂浜

新緑へ又あの頃がよみがえり

松江市 小林 孤 呂 二

貧相な人がデモのトップに居

事故無残お守り様も割れていた

蟹は泡ふきいたずらっ児へ構え

モデル今日自分の衣装で地味に居る

一人娘のお茶の稽古に座らされ

足止めのために農家の自家用車

大阪市 河 井 庸 佑

口数の多い男で出世せず

いふし銀の真価見ぬいている度量

ぼろくそに言うのが偉いよう思い

鳥取県 森 田 布 堂

紫蘇の香に母を偲んで梅を漬け

書留の布施にこまごま亡夫想

海底の魚は波の音知らず

西宮市 野 呂 鷯 汀

登り坂素直に妻の手が握れ

憎しみも五分程あつた愛の鞭

待ち呆けこれが最後と言う煙草

岡山県 大森 娛 句 楽

漫画家の個性に馳ねる鯉のぼり

愛玩の蕾もがれて叱れない

石段へよろめく足も神頼み

島根県 藤 井 明 朗

体育会 足の弱さを知らされる

あきらめがついて弱身にされている
孫に真似されて苦笑して居れず

高槻市 福田丁路

祈禱料ばかりは値切る勇氣なし
口下手の祝辞暗記の甲斐もなし
ゆとりある暮しに何か一つ欠け

神戸市 仲 どんたく

医師遂に四十肩にしてしまい
闘志かき立てて突っこむ満員車
骸骨になる者同士酒を酌み

熊本市 有 働 芳 仙

只歩くだけで嬉しい手の温み
みんな上げる気持へ男遠廻り
その辺が手を打つ値段時計鳴り

鹿児島市 土岐トク子

毒舌が背負う苦勞を泡にする
病む妻の頬に一瞬紅がさす
白バラと紅バラ成人の娘よ

尼崎市 高 津 徹 也

新しい石鹼をむく一人旅
ウインクへふところの金目算し
うたたねの妻へすだれをおろす時

宇部市 平 田 実 男
末席の発言みんなに振り向かれ
まき餌とも知らずに飲んで出来た義理
答えてはくれぬ死顔がきれい過ぎ

和歌山市 西 尾 公 作

凸凹の世に眼をそらし宿直す
故郷はまだ煙吐く汽車便利がり
メーデーの疲れを濛に蛙きく

今治市 越 智 金 水

父死す

御見舞を笑わす父の大あくび
ひょうたんへ酒をみたして旅にやり
好きだった酒でくちびるぬらしやる

堺市 高橋千万子

橋の名はそのまま川が道になり
水涸れた伝説うそのような川
その辺をさがしてくれと古本屋

桜井市 岩本雀踊子

年頃が母に似ていて座をゆずり
愛情の過信すねてみる心
断層に地球が生きて来た歴史

八尾市 高 杉 鬼 遊

酒飲みのくどさが十時十一時

辞めますと言う切り札へああそうか

影歩く僕へ日向の手が出され

出雲市 原 独 仙

読経が長びき正座崩れかけ

親善の野球あれから寝た夫

この肌が資本モデルの長い風呂

泉佐野市 大 工 睦 夫

満開のバラそよ風に酔うて居り

たまさかの留守居に氣を揉む飯の出来

風凪いでべったり船足重たそう

富田林市 岩 田 美 代

去る者は追わずと決めたら帰って来

ありがたし事に難聴の妻である

誰よりも金を愛して遠くいる

兵庫県 大 江 秋 月

返済をきれいなうそで伸ばされる

連休の空をのたうつ鯉のぼり

でかいのが釣れてそれから小半日

大阪市 福 井 野 迷 路

そこまでとドクターストップかぶりつき

喜寿にして棘の無いバラ遂に見ず
贈収賄すまじきものは宮仕え

松原市 谷 垣 史 好

混浴と聞いて眼鏡のまま入り

お母さんに会ってと女一途なり

己れも出て来て人混みに腹を立て

枚方市 宮 川 珠 笑

節つけるあくび会議に小休止

酒飲ませ遊ばせサービス料取られ

伸びるより生きようがない陰の草

香川県 岡 田 拳 法

税金が憎くなるほど儲けたし

狭い道譲ればダンブも会釈して

丸亀城こども園

飛行塔母ちゃんだけはしがみつ

高槻市 山 田 季 賛

熱帯魚日本の水になれて住み

笑えないからだまって聞いておく

人を集めてそれからを考える

大阪市 室 谷 鉄 舟

妻の愚痴さかなに中年馬が合い

花見酒ござ一枚が我が世界

三月三十一日市電消える

閉所式市電のボデー撫でて去に

笠岡市 出原真奇

故服部十九平さんへ

来年もくるよと云った手の温み

座布団をお茶をに無心云いそびれ

赤飯の湯気もくもくもうれしい日

松江市 中川晃男

倅せに浸って流す仕舞風呂

蔭口にやっぱり腹を立て凡人

若い氣でいて若者に邪魔にされ

松江市 柳楽鶴丸

親切な看護婦どんな人へ嫁くのやら

手術の日保険が少くないなと笑い

自問自答して自分に勇気づけ

岡山市 坂井三葉

目的も知らずゲバ棒の渦に居る

停年の其後を生きる靴を履く

鍵っ子へ嬉しい連休母が居る

東大阪市 竹中肖二

連休位い休めと親の氣も知らず

蒔いた種生えずに草の芽が萌える

食卓の広さをかこつ老夫婦

東大阪市 竹中綾女

お隣の在宅確かめ留守にする

松毛虫見つからぬまま十日過ぎ

蜘蛛の巣に顔なでられて鍵開ける

八尾市 古川鶴声

天気晴朗よき友が有りハイキング

春の風晴着の裾をもて遊び

春の海バスで集る潮干狩

大阪市 今西章雅

院内古墳

千年の露見せ古墳の石天井

長谷寺

観音へミニを覗かす長谷舞台

牡丹多彩ばたん桜と研競い

富田林市 浅川八郎

かたけれど事務屋の椅子はこれでよし

妃殿下もミニにお強くあらせられ

枝垂桜風へ素直に散るさだめ

兵庫縣 河原みのる

孫の縁談かまうまいかまうまい

田植だよ米価のことは思うまい

仲人がもひとりおなかに居る挙式

姫路市 隠岐不酔

くりかえすストと物価の駆けくらへ

労働歌家では偉い主人です

むり押しに古い頭を又一期

鳥取県 谷無閑

甲乙丙丁勤務評定子沢山

俺だからよいがと脅迫じみて飲み

お手伝い文学ずきと詩をつくり

島根県 福岡清夢

長短をどうにかさばいて今日を生き

喜ぶかにらむか白髪染を買い

又何か言う気出しやばり前に出る

西宮市 若林草右

みな惜しい枝へためらう花鋏

マンホール声だけがする工事中

大阪府 水谷竹莊

燃えるだけ燃えても内気よう云わず
はしご酒茶漬の店でもうやめや

小平市 石井高志

春の雨(二句)

春の雨木の芽の匂う音で降り

受けてみて濡れながら出る小糠雨

松江市 岡崎祥月

妻はよし妻有難し日日感謝

のんびりとお茶をすすって老夫婦

倉敷市 藤井春日

辞表出してから対等に物が云え

暴君に仕えて同役義理を欠き

大阪府 天正千梢

昭和元禄静電気の肌着

レモンしほれば不毛の心にしみる

大阪府 中川滋雀

坂本西教寺(一句)

静けさは頬を颯った叡山風

何入れる袋かバッグと別に持ち

岡山県 池田古心

勉強部屋作らせ恋のレター書く

人様は笑えど俺は真剣だ

京都府 清水谷句楽坊

老骨にむちうち死後の旅費かせぐ

仏の座ほこりまみれにして観光

西宮市 島居百酒

真っ盛りさけて吉野の悲史に酔い

何度目の最後かまたも無心が来

久留米市 永松道雄

不具に泣く妻の手となり足となり

先進を尻目に捌くイミテーション

和歌山市 垂井葵水

貨車去ってからの陽炎位置をかせ

惜しみなく与えて影にいる女

大阪市 横倉富久一

墓に水注いで父の背をおもい

よい石を拾って息が切れる帰途

大阪市 西川誓二

法華寺拝観(一句)

守り犬授ける尼僧の眉清し

神仏に誓うた酒だかのどが鳴る

熊本市 楠田ひで子

青葉若葉我が家の草もよく育ち

母の日は嫁の手製のお菓子たべ

大阪市 宮地双楽

欲得もはなれ竹馬と灯に和ごむ

もつれても解けて頼えむ夫婦仲

和歌山市 土谷城石

宿直へ何度かけても出ぬ電話

回覧をころり忘れた月当番

大阪市 古川静波

路郎忌に寄せて

励ましてもらった日の顔路郎像

今日の疲れを星と対話している寝椅子

普通寺市 岩田ひさお

甥の結婚ひろしまへ帰郷

木枯らしもある新緑へ発つふたり

堀ごしになるほど妻はヒステリー

加賀市 細呂木魯木

一対一法律は夫婦を冷たくし

仏画を掛けて悦に入る妻の留守

小松市 四方天弘美

メーデーの唱声遠く野良を打ち

骨董に凝ってガラクタ捨て難く

★

若木多久志

ロンドン塔にて

ギロチンの恨み数々秘めて建ち

パリにて

金色に塗られジャンダーク迷惑そう

マドリッドにて

フラメンコ顔よりタップの音に惚れる

情熱の国 やっぱり金が必要

コペンハーゲンにて

アンデルセンの像 隅っこでかしこまり

菊沢小松園

新郎新婦挨拶なんぞ聞いて居ず

鼻欠けてから野仏の拝まれる

幸せは女の親の耳遠し

誘い水なければ水も湧いて来ず

歩道橋の下で若者跳ねられる

清水白柳

息抜きのつもりか下戸の前へ寄り

どんぐり句会箕面吟行

猿に似た顔に出合うた滝の道

頼りないガイドで途中から戻り

披講聞く真剣な瞳よ句座の主

川村好郎

他人なら運が悪いでかたづけ

願うより願われている祖先の灯

パチンコにおやつを賭けるたね髪

車降りここから悔みにゆく歩巾

あきらめている円満と人知らず

西尾 栗

植木市妻は咲いてる方を買

老妻はゲタゲタ笑うだけのとりえ

パスの窓よく釣れそうな瀬に出合い

孫が来る嬉しさに新築はらはらし

苔生やす石を孫等のすべりんこ

北川春果

交通をやめても乗車率気に掛り

別嬪の看護婦さんただけ覚え

デパートにお勤め贈るものがなし

音に聞く超ミニの娘と乗り合わせ

うちの子はゲバを振わぬのを信じ

近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

よろこんでくれた七十七の祝

人間の形の如く出来た男

陳列のすみっこに翁はほこりまくり

缶詰の味は春夏秋冬のみ

おしゃれ服ちとたらぬ女にされ

金つかいちとめどがあると言われ

須坂市 高 峯 柳 児

冷やかな視線に縋る眼押えられ

不快指数返事の方もかん高い

座布団はにが手ミニの横座り

ほどほどに酔を絶さぬ独り旅

大洲市 米 沢 五 郎

嗤われてよし周到な傘を持ち

投書らん いたずらでない代弁者

連休へ貯金をおろす列続く

ゲバ棒は振ってくれるな鯉のぼり

今治市 月 原 宵 明

大切に累図をしまい落ちぶれる

散る花の佻しさ誘う風もなし

誓約書 文句言わぬと書いてあり
アカシヤの蔭で行商書きとめる
思ふことあつてか彼女髪を変え

和歌山市 秋 月 宏 方

猫の子もみんな歩いて陽はうらら
ミニはいて似合う若さを羨まれ
パリュームの味を覚えた胃も不幸
若葉して木も青春という姿

名古屋市 長 谷 川 鮮 山

もう少し時間を貸してまとめ役
常識の尺度を笑う知能犯
南から北へ北へと蜂の趣味

今治市 長 野 文 庫

ついでだと云って気持を軽くさせ
立候補する気か寄附の申込み
妻や子のために中年ごまをすり
二度同じおみくじが出て胸さわぎ

小松市 山 上 千 太 郎

城跡に花あり花どきだけの群れ
雨だれに孤独の心読みとられ
求めないことが実って明るい日
波立てぬ余生を護る土いじり

川傍柳 初篇研究

(七十三)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

563 やれ夫レといふ内にはまを蹴破り

一甫

清||渡辺綱が、鬼に腕をとり返えされたところを詠んだ句。腕をとり返えした鬼は、叔母の姿からものと鬼の姿になり破間を蹴破って逃げたとのこと、それ以後、渡辺家は破間を作らなかつた由。破間は屋根の切妻についている合掌形の裝飾板である。

三人へ面目ないと破間をやめ 拾五・24

高須||「破間を蹴破り」だから、ほかに考えようはないが、「やれそれといううち」とは何と拙ない言い方であろうか。何かモトがあつて、その文句取りとまでゆかずとも、当時はやつた洒落か何かではないか

丸||礎稿賛。「やれそれといふ内」は「やれにがすな、それつかまえるといつているうちに」と見ると、綱のうろたえた姿もほ

うふつとする。

岡田||同。「やれそれ」は当時の常套語 564 嫁夜着を洗つた晩はたわいなし

門柳

清||恥しい最中の嫁。まして夜着を洗つた夜のことだから、その恥かしがりやうも最高。

藤井||たわいなしは夜着を洗うのは重労働だから疲れてたわいなく眠るだけのこと。恥かしいどころか何の懲得も亡失した状態をたわいなしと言つたのだ。それこそその夜の亭主へのおつとめなどは夢うつつの事

だろう。

川端||前夜のことであろう。汗ばんだ夜着を洗つて、今夜はたわいなく眠つてしまつた。

高須||たわいなしは、とりとめがない、はりあがない、てごたえがないということであるから、藤井・川端説の逆ではないか

夜着を清新にしたので、夜のいとなみもついたわいなくハメをはずしたと解すべきではないか?

夜着きると妾は智恵が分に出る 一〇・21 前田||たわいなしは、とりとめがないにいたい。即ち恥かしさとか、はめをはずすとかいったものを超越した感じである。この句、情緒的で艶があり「洗つた晩は」の晩はひびきも見事である。

丸・岡田||藤井説でよい。

565 白壁を見るときめ出す旅帰

五連

清||旅に出ていた亭主、久しぶりに帰ってきたが、壁を見ると何やら落書きがしてある。よく見ると相合傘の下にうちの女房の名前と男の名前。さては留守中に間男でもつくつたかと騒ぎ出す。

藤井||旅の留守の間男騒ぎは川柳によくあ

るところ、ここでは連れの男が親切にも発
見して教えてくれたのではあるまいか。

高須「白壁を見てから騒ぐ旅婦り」で、

どうも古句の表現には、わざとではないら
しいが、こういう過・現・末のハッキリせ
ぬ話法がある。見るともめ出すという言ひ

方は、我々だと刹那的な感じしか受けぬ。
旅婦り不機嫌な顔気にかゝり 一五・5

の女房は、うしろぐらい所があるらしい。
前田「礎稿賛」

白壁を見ると去り状ふつつける 二一・28

丸「礎稿賛。白壁を見ると、何か書いてあ
る。その事から夫婦の仲がもめ出す……と
いう気持であらう。

岡田「賛」

567 夕立最中たのんましよ／＼

五 鳥

清「夕立の最中に来客の声。その声をよく
聞けば最近無沙汰ばかりしている知人。さ
ては夕立にあい、よんどころなく傘を借り
に寄ったか。

藤井「たのんましよ／＼」であわて急い
でいる風がよくでている。

川端「賛。『濡れにぞ濡れてたのんましよ
／＼』(宮一・38)

高須「傘借りに沙汰の限りの人が来る」

(一・35)「近付きを考えている雨宿り」
(三・26)など類句沢山あり。現今でもあ
ることである。

丸「岡田」諸説につく。

568 薄雲ハ又候下駄のもゑつく

門 柳

清「すでに出了綱宗と薄雲を詠んだ句。伽
羅の下駄に因んだ句で

薄雲が座敷は伽羅で蚊をいぶし 五一・11
薄雲の時にはたゞの御下駄也 宮二道3

藤井「又候は又そろそろか。下駄のもゑが
わからぬが燃えとする。つくぬはつくるで
はあるまいか。こうきめて我流で解すると
高尾も死んだ、二度目の薄雲太夫に仙台侯
が通いつづけたから、そろそろ立派な下駄
……二代目の伽羅の下駄が又豆腐屋で燃や
される頃だ。とにかく下五字がわからぬ
高須「もえつくゐ」は「燃えつ杭」で焼
っぱくくに火がつきやすい例えをとって
「又候」がきいたわけ。

薄雲は当世高尾古風なり 二四・22

は薄雲は高尾のような古風な意地はもたな
いことを言つたもの。

薄雲をたなびかせたは二度のどら
薄雲だからふろうかと初手思ひ 玉・11

薄雲は陸奥と名を替えがたり 傍一・29
など薄雲の句は多い。

前田「又ぞろ下駄」「燃えつ杭」がわか
らない。この句当時の流行語をもじつたも
のか。

岡崎「燃えつ杭」は高須説に賛。「又ぞ
ろ」はまたもや、またまたの意。

丸「燃え木材には火がつき易いという俗諺
をふまえた句作ではあるが、どうも字句的
にはつきりしない。高尾に夢中の時は仙台
侯伽羅の下駄で通いつめ、その下駄も豆腐
屋で危く焼け木材になる場面もあった。高
尾亡き後またまた薄雲に通い出した。それ
は焼き木材に火がつき易いように下駄のも
えあとに火がついたとでもいうべきであら
うか……とでも解しておこうか。

岡田「高尾で懲りた筈なのに、焼け木っ杭
に火がつきやすいの諺その通り、放蕩がや
められず、またもや薄雲を。

直原 玉 青 著

創元社出版
二千元版

「新しい南面と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。



ありし日の路郎先生と葎乃先生

子よ妻よ ばらばらになれば 浄土なり

— 路郎

麻 生 葎 乃

しい芽生えを推奨し問題にしていた事もあった。

然し一般に川柳は文壇の下積みになっていた。川柳はもつと地位の向上を計らねばならぬ。伝統だの、革新だのと互いに小さくひしめき合っている時ではない、先ずさきに社会への進出をめざさねばならぬと考えた路郎は自己独得の句風を暫く断念する事にした。「川柳雑誌」の誕生はそれがためであった。

その後全国中学の国語教官を訪ねて従来のあやまれる川柳観をたゞし、学生にも川柳を作らせた。北支蒙強への川柳行脚、川柳人協会の設立と企画は次々と運ばれ、遂に川柳職業人を宣言して立った。

激しい性格の路郎は平坦な道を好まなかった。平穩無事な生活の単調さに堪えるよりは喘ぎながらも苦難の道を切り開くことに生甲斐を感じていた。過去何十年間の彼の生活は川柳の理想境いまだ遠しの焦燥と資本の不

それでも彼は借金はいしなかった。借金はなかなか返済出来ぬものであると知っていたからである。晩年彼は図書館の一室へ短詩文学文庫を創って貰い、古今東西の名著を網羅する野望に燃えていた。じりじりと衰えて行く彼のヴァイタリティーはそれさえも見送らねばならなかった。誰しも逃れることの出来ぬ人生の黄昏を彼はどんなに淋しくみつめたことであろう。

ある時は、ふと家族のものを巻ぎえにしたかのように思われた日もあったであろう。娶らざりしならば、子を持たざりしならばと悔やまれる日もあったであろう。私よりも子煩悩である筈の彼は、唯の一度も子供の頭を撫でてやる暇もなく世を去った。今は父であり夫である因縁から解放されて、はじめて安住の地を得た彼である。残されたこの一句を抱きしめて、心の限り祝福してあげたい気持ちでいっぱいである。

少年時代から川柳、川柳と言って暮らしていた路郎は結婚後も川柳は忘れなかった。「土団子」の廃刊後は川上日車氏等と新傾向の川柳を「雪」へ毎号発表していた。これ新短歌と称していた。「雪」は評論あり、絵画あり、俳句あり、短歌ありの文芸総合誌であって、画伯小出楢重氏なども同人の一人であった。

新短歌なるものはあまりにも尖端を走っていたので、当時の柳界にいられず、異端者扱いをされていたが、歌壇の一部ではこの新

路郎先生の 一句について

右城 暮石

雲の峰と言う手もありさらばさらばです

この句の発表されたのは、先生が亡くなる前年だったかと思うが、当時の「川雑」誌がどう探しても見当たらないので、あるいは亡くなられる直前であったのかも知れない。何れにしてもこの句の「ささらばさらばです」は、「死」を意識されての発想であることに間違いはあるまい。

「雲の峰」と言うのは、俳句では「物」であると共に「季節」でもあるが、この句では「物」だけで「季節」には全く関係がない。このことは「雲の峰」の働きを仔細に見ればよく分ることである。

すこしくどいようであるが、「雲の峰」は「選句業覗き込む」（山口誓子）の「雲の峰」は「季節」であってこそ、作品の内部構造が成立するのだが、川柳の場合は、「季節」的働きは、作品をふやけさすだけに終ると言えさうである。

さて路郎先生の句意は、雲の峰となつてこ

の「娑婆」を瞰下すと言う手があることに気がついた。皆さんよさらばさらばです、と解したい。従つてこの「雲の峰」からすぐ「山越弥陀」のことを連想した。

はじめ「雲の峰」と言う手「通走の手」かも考えたが、前解の方が路郎先生らしい「骨」が感ぜられてよろしいと思つたことである。

昭和三十年に「学生教養新書」として出版された、「川柳とは何か」の先生の自序に「私は川柳を人間陶冶の詩であると言っている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。（前略）」とある。

「雲の峰」と言う手もありさらばさらばです



大正十三年八月二日・小西鬼絲子撮影

「は、生涯を作句の締め木にかけつづけて得た、脱俗の一点句と言えないだろうか。

奇縁に恵まれて私は数年間、先生と句座を共にする機会を得た。そして先生の風貌を通して、川柳による脱俗が如何なるものかをおぼろげながら感じ得たかのように思われる。（天狼同人、運河主宰 和歌山短詩型文学クラブ講師）

路郎先生の この一句

北川 春巢

健保の医者 of ヘイお次 ヘイお次

昭和三十七年七月号に発表された句である。路郎先生は、世の中のことには裏の裏まで何んでも知つておられた。それでこそ名選者と言えるのであるから当然のことではあるが……。

路郎先生の句集「旅人」が発刊されたのが昭和二十八年十一月で、私が「近作柳樽」の選を仰せつかったのが昭和二十九年七月号からである。私は選をする前には必ず「旅人」の何頁かを読んで、それから選に取りかかるのを常としていた。従つて「旅人」の句はほ

とんどそらんじている。そして読む度にどの句にも感動し、またどの句も好きである。

私は今回の編集部からの注文に際し、「旅人」以後の句を応募したいと思って、昭和二十八年から先生の亡くなられた昭和四十年までの句にひと通り目を通してみた。昭和二十八年のはじめ頃に雑誌に発表されたもので、「旅人」に載っている句も若干はあるが、それも含めて総計で約九百句であった。

言ってはいが悪いが、晩年の句には破調の句が多く、私には難解の句もあった。しかし破調だからどうだ、というのではない。大いに感動してここに発表したい句もいくらかはあったが、私はとにかく十七音字の句を探ることにした。先生の句も、先生のご経験の句、実感句が多く、通読すると先生のその折々のご動静がよく分って、改めてなつかしく思ったことであった。

しかし先生が昭和三十七年頃「健保の医者」にかかられたことは知らなかった。あるいは当時の新聞記事か何かで健康保険医の仁術ならぬ算術ふりを知られて、この句が出来たのではないかと思う。医者である私には針でチクリと刺された思いがしたのを覚えている。「ハイお次 ハイお次」の「ハイ」この医者の乱診ふりを表現して余す所がない。「ハイお次」ではこの感じが出ないと思うのである。

ありし日の路郎・三太郎両先生



路郎氏被迎、タ

子を死なし
学校に子の
多いこと

八木 摩天郎

亡くなった子を憶うせつなさ、学童の遊び
載れる声を聞くに耐えぬ当時の路郎師のお心
持は、若本多久志氏の著「親ごころ子心」の
序文で明瞭なので、今更贅言を要しない。

ロンドンが帰って来るか自重也
お父さんは川柳川柳云うてるよ

お母さんのこの頃瘦せたのがわかるかい
まぼろしであつたか死んだ児の裸
一周忌かしこもこも草萌ゆる
一周忌こんな蒲団で寝ていたか
紺紺今はアートのために裁つ

三周忌今はつかはぬ硯石

などと走馬燈の如く句がまざまざと、まぶたに浮ぶ。昭和四年が三回忌であつたので昭和二年に亡くされたので私は当時知らないが、よほど、よく出来たお子達だった事は昭和六年一月、堺市役所で、ある日ロンドンさんの戸籍を横文字で入れる事についてのお話や、ロンドンの後は名前をパリィにせなかった理由「月並川柳の考えならパリィだがネエ」と話された事も追想されてくる。私も男児二人を先き立て、悲しみを持っているが、生後僅かだったのであきらめている。しかし、あの苔の下に祖母に抱かれていた姿を思う時がある。今から十五年前「旅人」が出来た当時「南海電鉄川柳柳会」の席上、先生が「僕の句の中で一番感銘した句は、雄声クン、どれだ」と聞かれたら、すぐ右の句でありますと私は同感の句を述べた事があつた。それを聞いた先生、急に頬を曇らせて涙の露も光る思い、横で聞いていた私も頬がぬれた。お答えをした雄声クンも急に悪い事をした思いで顔を伏せていた。この劇的シーンは、南海の粉浜の親和寮だった。歳は移り、会場はかわり、今

緑内障

高鷺 亜鈍

(森下青氏へ)

緑内障きいただけでもヒヤッとす
生れつき歌舞音曲に疎いぼく
きげんよく喋舌りだしたが阿呆な俺
聴いても言うても政治の阿呆らしさ
考へるとどのつまりは詩について
金儲けが出来てえらい按摩さん

首だせば影は空氣にいつぱい
肉眼を開かせ給え人間くさく戻らせ給え
暗くとも純粹の花咲かせ
まっ白無限に一点のしみ
無か有かそれは無限に有か無か
飛ばぬように押えておこ夢の羽根
表情の動かぬままに凍りつく
青い花に胸をつきさしている女囚
逆光へ青春が墨となり
喜びは与える方がわにあり
いのち延して万国博へ杖むけん
音がする声がするなり白日夢

川柳日記

麻生 葎 乃

五月の句



浪費家へけだるう暮れる藤の棚
山越せばはや夏の風カーの窓
一本も二本も抜けて暮して来
葉桜は雀のお宿騒しい
狐の嫁入り盆地は低い色瓦
農協は鉄骨山がかこむ町

夢をみる愉しさに床へ入る
見えずともスクラム組める腕がある
何となしにおもいつめては欠伸する
信心はありがたいなどと嘘をつけ
キリストを真似るつもり不精髭
組織とは関係のない怒り
約束をちがえ待つ身に慣れている
誰も彼も忙しいのだほっとかれ
見すごした眼の不仕末を詫びる
音のない渦潮のなかで揺れ
風鈴が夏のしらせをもつてくる
玉虫色に羽やすましている蜻蛉
淋しいけれどひとり死ぬ
可能性身体いっぱいもつ若さ
老木の故に火がつくエネルギー
枯れているから直に火がつく直ぐ消える
心眼で活字が拾いよめるだろか
口中の髪の毛一本もてあまし
ヘアクリップ菓子とまちがえ口に入れ
肉眼も心眼もあかないままでいるダルマ
聖書じゃないが目玉くりぬき色懺悔
三回忌兄の写真をなでてみる
日にあらたあらたなものに火を点ず
漆黒の泣訴に白い珠二つ
靈歌妖しく地上から湧く
白くともくろくとも赤い血よ
巫女逃さじと柱を掴み
親蟹も子蟹も月に爪をあげ

梅蘭芳の髭

東野大八

梅蘭芳——といっても一般にはぴんとこない。しかし、知る人ぞ知るこの人こそ中国京劇不世出の名女形であり、大御所である。在世なら当年七十五歳、だが数年前に惜しくも他界した。

私が北京の新聞社にいたのは、昭和十四年ごろだが、当時の北京の盛り場や、目めき通りには華麗な梅蘭芳の舞台姿の大額が至るところに見受けられた。中国国民渴仰の夢の大スターの貫録十分というところ。

当時、北京には京劇の一方の雄であった程硯秋、金少山、李万春などがいたが、中国梨園の名門で、第一級品と絶賛された程・金両優も梅の名声に及ばざること懸雲万里の観があった。

そのころの北京にたむろしていた日系新聞社の記者をはじめ、日本大手の特派員諸君は一種の京劇ブームの如きムードにあけくれて

いた。若手の私なども四、五人とグループを組み、さかんにピンからキリまでの、京劇の小屋めぐりをやった。その中に、酒友岡崎俊夫がいた。彼は朝日の記者で東大支那哲卒の俊秀、往時はまだ私とともに二十歳台だが、「老殘遊記」を訳出して出版していた程だ。月給を半分削られても北京へ行きたい、というのでやってきた男だ。随って、京劇の方も専ら彼の幽遠なる学識と、語学の才におんぶして、私は鹿爪らしく北京一流の京劇のヒノキ舞台、新々戲院のかぶりつきに愛着した。この劇場の正面玄関には、電飾付の大看板、程硯秋の文字が西単の繁華街をへいげいしていた。彼は京劇切っつのインテリで、その点ではさすがの梅蘭芳も頭が上らなかつた。彼は終戦直前に、欧州演劇界を視察してきて、記者会見した際、こう語っていたのを思い出す。

「劇の演出において、欧州演劇から学ぶべきものは何もない。むしろ欧州の演劇が中国の京劇の影響をかなり強烈にうけている」このことは一九三五年、梅蘭芳が訪ソした際の帰来談にも、同様のことが語られている。つまりソ連では、雨の舞台には、本もの水を使うのだが、梅の舞台は、絹の布切れ一本で見事に雨を象徴化している。この東洋の舞台の象徴化に、ソ連の演劇人はどっとせきを切ったように傾倒している。

京劇の舞台は、徹底した象徴主義で、日本の伝統的な舞台装置は、頭から否定している。つまり数個のイスとテーブルさえあればそれでよい。木製の粗末なそれは役者の粉装によって、あばらやにもなれば金殿玉楼にもなる。イスを横にすると牢獄になると思えば、一本の棒に布一枚をかければ、艶かしい寢所となる。ムチを手にして、ノボリ数本を背負って出れば、戦野の將軍である。観客は、そういう約束ごととは百の承知、二百も合点なのだ。

舞台はだからヤボな引幕や、揚げ幕は無用である。はやし方も舞台の片方に、便服、ふだん着で胡弓、胴羅、蛇皮線を一かたまりになつてやる。けんらん粉黛の、老生や武生や青衣がすぐ横で大熱演しているのに、音楽担当の御連中は、手があくとお茶をのんだり、おしほりを頂戴して、さあおれの番だと言っている。イギリスの皮肉屋バーナードショーが、梅蘭芳の舞台をみて

「演技中に手バナをかむのも、名優の演技

のうちか」

といったのは有名な話だが、これも京劇ムードの特質だろう。

京劇といえは、直ぐに眼にかぶるのが隈どりだ。簡略すぎるほどの舞台の空間は、顔面の彩色に集中したためそうだったのだと、素人の私は岡崎に真顔でたずねたぐらいだ。

日本の歌舞伎の「暫」などの隈どりも京劇の垂流であるわけだが、京劇はその色どりに性格描写的規範がある。すなわち赤は忠魂義烈で関羽が用いる。黒は性格露呈の顕著なもので項羽がこれだ。白が陰剣邪惡の相で曹操がこれである。

京劇はこういった隈取りがあればいい「老生」や「武生」が座長格で、女形を指す「青衣」はつねに三位以下で、傍役扱いが多年の伝統であった。しかし、これを根底から覆したのが梅蘭芳である。彼の人氣と實力による一大異変がこういうことになった。梅蘭芳の一世の名舞台といわれる「貴妃醉酒」は、そういう梅の貴録と実勢を最高度に誇示したワンマンショーといえよう。

日華事変が始まり、北京が日本軍の制圧下におかれたとたん、梅蘭芳は香港に走った。そしていきなり鼻の下にヒゲを蓄えた。まだ男盛りの四十代の彼なのになぜそんなことをやらしたのか、それは無条件に舞台を放棄したことになる。

「梅蘭芳といえは、蒋介石や毛沢東より中国民衆はよく知っている。その彼が日本軍の侵攻と同時にヒゲを立てた。僕は彼のヒゲに

よって中国民衆は抗日戦の何んたるかを知ったと思う。日米戦争へ結局日本を馳りたてたもの、それは梅蘭芳のヒゲだと僕は確信する」

岡崎は私にそういつて、ダンコたる顔付である。

案の定、昭和二十年夏、日本の無条件降伏と同時に彼は、問題のヒゲを苦もなく剃り落した。そして全中国にかく声明した。

「私は足腰が立たなくなつて舞台が動まらなくなるまで役者をやる。役者をやめるときそれは死ぬ時だ」

これは彼の還暦の祝いの日の挨拶なのだが全中国民衆の喚呼の声がなりひびききそうな名セリフだ。

「彼は日本へ二回（大正八年と同十三年）にやってくるし、アメリカへ一回、ソ連へ二回も行ってゐる。彼は元来共產主義者ではないのだ。世界の人民が手を一つにして、演劇の楽しみと喜びをわかち合うことに生甲斐を感じた人だ。だが人民中国で、彼の夢想する京劇が果して受け入れるかどうかだ」

終戦後にきた岡崎からの私信にこうある。日本の降伏と同時に、彼は人民中国の中国戯曲研究院々長となり、中国総合文化団体の常任委員となった。新中国の国会議員クラスで、文化（演劇）の最高責任者となったわけだ。それは結構なんだが、新中国の政体は、かつての京劇の存在を決して許しはしなかった。革命中国のイデオロギーは、逆に京劇の梅蘭芳をして、京劇自体の改変に大ナタを揮

わせる結果となった。

「梅蘭芳の死は、そうした大改革の直後にきた。僕は彼の死はその哀惜深い京劇の一大刷新の心労によつて早められたのだと思う。彼の書の「天女敬花」「黛玉葬花」「白蛇伝」「霸王別姬」は禁演あるいは大変貌を遂げる。自らがおはこれの「貴妃醉酒」すら葬らねばならぬ。その苦衷、彼も人間である以上、懊惱悶苦の日々があつたにちがいない、死は当然やつてきた」

岡崎の手紙が、そういつて泣いてゐた。

昭和三十一年「京劇読本」（朝日新聞社刊）が出た。その著書は石原厳徹（青竜刀）と岡崎俊夫の御兩人である。当時、どうしても手に入らなかったのが、このほど偶然にも、瀬戸の古本屋でこの古本とめぐり合った。欣喜雀躍して青竜刀さんにその旨をつげると、眼を細めるようにしての喜びの返書ももらった。その中にこうかいてあつた。

「彼は早く死んでよかった。京劇をピアニ伴奏にするような江青とは、しよせん長生きしていてもウマの合うどころではなかったらう」

今はむかし、この青竜刀が敗戦後の神田でパイカルを片手に「四郎探母」をうたったことだが、この不朽の名劇といわれた作品も真先に禁演となり、永遠にこの世から抹殺されてしまつてゐる。そして青竜刀に劣らずこの曲を熱愛してゐた岡崎も今はこの世にない。

秀句鑑賞

：前月号から：

市電に生きてたながらが酔う

児島与呂志

昭和四十四年三月三十一日限りで大阪から市電の姿が消えてしまった。市民の一人として愛惜の念に堪えないがこれも時の流れとあれば仕方がない。作者は市電で生きてきた男であるから殊にその感慨は一しおであらう。しかしいつまでも泣いてはおられない。配置転換などのために一年間休んだ「川柳大阪」も五月から復活したのも今の職場に定着したからであらう。

今後の活躍がたのしみだ。

一合五勺天下天下われのもの

本田恵二朗

うれしい句である。私は下戸なのでこんな気持ちには知らないが、推測することは出来る。殊に作者の飄々とした話振りからもその一合五勺（リットルではこの感じが出ない）に満足しているのが目に見えるようだ。

清水白柳

輪の外のひとり天才かも知れず

三宅不朽

天才とよばれるような人はどうも孤独なようだ。だれとでも心安く話などする男には天才の素質がないのかも知れない。だから輪の中にはそんな天才はいないのだろうか。最良のものに對するあこがれ、そんなことをこの句から感じた。

さまよいの果てにつかみし珠一つ

久米奈良子

やっとつかまえた珠は果して幸福をもたらす珠なのかどうかは作者もまだ知らないであろう。しかし、そんなことはどうでもよいのだ。さまよいの果てにつかんだ珠はしっかりと胸につかんで置くだけで幸福なのである。

たぐりよせてみれば結び目なきえにし

岩谷二三枝

縁は異なものという古い言葉があ

る。幾重にも結ばれて解きはぐすことの出来ない複雑怪奇なえにしの多い世の中に、これはまた珍らしいえにしである。それが何をあらわそうとしているのかは作者にだけしかわかっていない、がその何かを読むものに感じさせるだけでもよいのだと思う。

諍うて指の先まで淋しい日

黒田真砂

女性のせん細な心の動きがよく描写されている。殊にこの作者が洋装店を経営しておられるのだから指の先までというのが特によくわかって、実感というものの重量感がひしひしと迫ってくるのである。

吹き溜り愛のかけらをもて遊ぶ

小谷葉子

吹き溜り、それは心の中にポツカリとあった空洞の片隅にあるのであろうか。そして何かにすがりたい気持ちちがゆれ動いているのだろう。結語のもて遊ぶは、もて、遊ぶと読むのと、もてあそぶとはニュアンスが違うと思うが私は後者にしたい。

こだわりを捨て切れぬ夜石を蹴る

米原靖子

男性が詠みそうな境地だと思った、石を蹴るという句語がそう感じさせたのだがこれは

作者の実感であるのかも知れない。逢うての
帰り、どうしても割り切れないものが胸の中
に残っている、それがこうした行動をとらせ
たのであろう。最近の若い女性は一行動的だか
らネ。

生むことに決めて勤めの靴をぬぎ

燈 本 満 子

共稼ぎの若い夫婦であらう。子供を産めば
勤めに出ることが出来ないで今日までコン
トロールしてきたのが出来たからには産み
たいという母性本能を詠っている。靴を脱ぎ
という結語は勤めをやめるということである

落花さかん激しき恋の終りかも

江 城 功 雄

桜の句は二十句以上もあったがこの句は私
の心をひきつけた。それはさりとて詠みなが
ら深いものを感じさせてくれるからである。
恋の終りは桜の散り際のようにありたいと願
うのがすべての男性の心であるからであらう

くだまきに吉野まで来るほど平和

木 村 水 洞

レジャー時代とか浪費時代とか言われてい
る程なので世の中も家庭も平和そのもののな
のである。だから家では飲んでくだをまく種が
ないのだ。グループか何かで花見に出かけた

時に解放された気分になってくだをまかれた
幹事の渋い顔が目に見えるようだ。

女性上位 大工の道具までそろえ

工 藤 甲 吉

うちのかみさんは窓へ虫除けのアミを張つ
たり、蚤んだアミ戸をこしらえたりするがみ
んな私を当てにしてやっていることで結局は
初めからやり直しという次第。それ程でなく
ても御近所の御主人達がみんな器用になさる
からあなただって、というところである。

客に来てまで水道をしめに起き

本 多 柳 志

トリビアリズムがよいとか悪いとか問題に
なっているようだが、この句などはトリビア
リズムがよいという見本のように思う。年
輩の女客が音を立てないようになにを使いな
がら蛇口をしめに立ってゆく心遣いなどをうま
く詠んでソツのない句である。

ちびた靴はいて来たのに税まけず

室 谷 鉄 舟

税務署へ行くのに作業衣のままで行ったり
不精髭をのばしたままで出かけても、それは
演出であることを直感するのが署員の年輪で
あって、却って印象を悪くする場合の方が
多いものだ。靴にまで気を配ったのという

作者の着想は面白い。

甲子園スカウト意識して打たれ

平 田 実 男

春の選抜にしろ夏の大会にしろ高校野球の
醍醐味は純真なブレイに魅せられるからであ
る。マスコミに騒がれた投手がスカウトを意
識するのは当然であって、意識するなと言
う方が無理である。そこらをつましく詠んで

句碑をのこす未練たらしき人の世や

後 藤 梅 志

最近句碑を建てるのが一種の流行のよう
になっている。自分の句碑が建つということ
は何物にも替えがたい嬉しいことであるのは
いうまでもないが、中には句の選定を誤った
のではないかと思うようなものもあるようだ。
作者は自分の句碑が建たないからひがんで
いるのではない。後世の人が作者の句を彫っ
て建ててくれるような句を残したいという悟り
の境地に立っての作品であると思った。

カラー表紙・七月号発売中

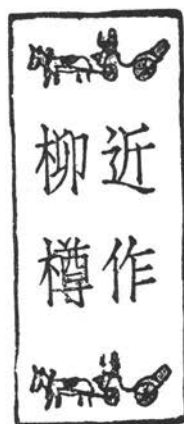
秋田実主宰・不二田二三夫編集

月刊「漫才」

定価 百円
送料 六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八



菊沢小松園選

米子市 八木千代

二十歩を踏めば二十の足のあと
老杉の梢あくまで天を指し
満員の車席で果てもない孤独
潮時と氣付きそろそろ言い負ける

和歌山市 増田めぐみ

ランドセル入院の子の枕元
はさみ持ち切らずに戻る庭の花
咲きすぎてもらわれてゆくばらの花
申すことなくて見上げる鯉のぼり

姫路市 前田 芙巳代

義弟急逝 (二句)

白足袋の白あざやかに喪を装う
暁の光りが届く雲への階段
媚びる声しか持たぬ鳩まばたかず
告白の瞬間過去となる愛語

大阪市 小谷 葉子

残されし言葉に乏しい眠り
灯を消して心の隅に燃えるもの
ながき長き夜を自尊心との闘い
嘘一つ友をそこなうはめになり

岐阜市 市川 鱗魚

鉢植えにすれば菜種の花見事
金魚鉢孫の育ちの置きどころ
齡だけの知恵で物言う座りだこ

八幡浜市 別宮 すすき

引きぬかれる運命と知らず草芽ぶき
詫びかたのコツも教えて嫁がせる
故郷はいいなア雀におこされる

大阪市 和田 痴亭

捨てた車券踏んでもゼニの音はせず
コーヒーに男の未練沈みがち

貸し借りも無くて頑固が押し通せ

大阪市 江城 功雄

友ありき命散らした日の軍歌

いさかいて捨てて煙草のねじまげて

人散った広場にもとの風戻る

岡山県 武元 柳子

箒もち払うた蜘蛛を見失い

人気ない方へ歩んだ二人連れ

婆ちゃんに買ってもらえと教えとり

尼崎市 中溪 慶彦

妻の肩もつ母が居てつつがなし

めくら判押すに眼鏡を二つ持ち

慰謝料をとってみにくい恋にする

下関市 川原 菊醉

パチンコの玉へ孤独をすてにくる

くしゃくしゃの顔で嬉しいめぐりあい

目薬に関係のない口をあけ

出雲市 板垣 草丘

わかめ売り去年と同じ声でくる

朝のくちづけもう起きていた雀

蟻が引く蝶が地を這う昼さがり

大阪市 黒田 真砂

繩のれんたまに夫と平和です

待つ人のある倅せよ春の雨

母の日の母には遠く寿し作る

出雲市 王紫

囲炉裏の灯消えて生家の世は遷り

ビルの谷間身を細う細う風が抜け

やってみろ他人事だから強く言え

守口市 岸本 豊平次

身体髪膚何が不足の付黒子

不遇な雑草日蔭に芽を出して

朝寝坊ネクタイまでがさからって

竹原市 生信 笑子

否定するごとし潮騒のこだまする

水の輪の不思議まろくまろく澄み

切り花の命新聞紙にくるみ

八代市 船木 史朗

言い勝ったあとをむなしい酒の味

恋してするように柳は身をもだえ

俗名で請求が来た医療代

大阪市 藤田 頂留子

室生寺参詣（一句）

釣れるかと問いかけそうな岩仏

八瀬大原清遊（二句）

衣ずれがしそうな雨の三千院

柴漬に昔の暮しの知恵を見る

島根県 堀

江 正 朗

物言えば愚痴が出そうで固く閉じ

手さぐりへ薊の刺は意地悪い

模様替えした欄干を手で覚え

島根県 堀

江 芳 子

早寝して夫に所作ない朝まだき

いざこざの原因撒いた子の寝顔

夫病めばなお切り出せぬ金の事

竹原市 三

宅 不 朽

今日も嘘考えながら癌見舞う

イチゴ摘む娘の指なおもみずみずし

愛深く秘めて鏡へ日々おびえ

宿毛市 瀬

田 美 知

まといつく子の手はどいて朝を出る

いたずらへ一矢むくいて貝となり

石一つ投げて波紋たしかめる

河内長野市 森 本 黒天子

ほめられる度に花鉢減ってゆき

我が家がほしいとなりへ家が建ち

咲いて呉れる秋を夢見て菊作り

大阪市 奥 川 継之助

純喫茶此処にも閑（ひま）な人が居り

ハネムーンらしい疲れた戻りよう

旧交を温ため金を借りられる

島根県 小 砂 白 汀

方円には従い岩にはくだけ散る

風るるるると葦の葉にうたう

嫁った娘の部屋砂漠より広い

東大阪市 坂 東 若 芽

栄転の留守のさくらが美しい

人間はきたなし皓々月は冴え

人間の自我に恥じる日の多く

米子市 林 瑞 枝

悲しみを濡れるこぶしの膝で堪え

地位と金浮気しそうで気を揉ませ

京都府 福 村 飛 龍

値上げする定期買ってる列に入る

バラ錢を出せばごみまでついて出る

大洲市 堀内 曉風

ただ一つ残った菓子へ手を出す勇氣
すすり泣く遺族へマイク用捨せず

倉敷市 小野 克枝

毎度有難う商売それでよし

幼稚園ここにも教育ママが居る

東大阪市 宮西 弥生

天の橋立にて

絵葉書にない橋立に夕焼ける

橋立の松原二人で来るところ

大阪市 梅園 摩耶

いちごの香りふりまいて市場籠
潮干狩りわかめも少し持ち帰り

土佐市 海地 大破

足摺行

燈台の雨はゆっくり溶けてゆく
地の果の燈台みごとと壁面となる

八尾市 香川 酔々

沖繩の怒りの上をジェット飛び

蔭口が慌てて誉めた顔になり

堺市 藤谷 象園

風呂上り春愁しばし身をまかす

行儀よく並んだミニの膝小僧

堺市 羽田 一扇

何事もなしヌードスタジオを出る

口下手がバーで灰皿汚すだけ

岡山市 目賀 芳月

神様が御存知だけでは物足らず

総入歯昭和の味をほめて無事

河内長野市 小川 耕人

天気予報ズバリ当った雨やどり

雨やどり濡れたチラシを握らされ

愛媛県 岐本 満子

わびしさは子のない茶の間の夫婦箸

飯場の灯糸が通らぬ男指

堺市 藤井 一二三

寝汗かく児に窓開けに起ち閉めに立ち

アンケート我がくらしまあこの辺り

大阪市 加納 楽々

住む世界違うダイヤの指が揺れ

階段のもう一息をミニが抜き

大田市 藤 田 軒太楼

近道を知って人生軽くみる

役付となつて春闘懐しむ

鳥取県 川 崎 秋 女

連休の予報も添えて誘われる

一言が多すぎました日記閉す

今治市 原 田 輝 親

ああ五月心の窓を開け給え

子供だけ入場無料子供の日

今治市 古 野 伶 人

良い季節考え事は後廻し

使い道無い者同士暮を囲み

鳥取市 稲 村 光 枝

結論を急がれ女気が変り

手の掛かる夫よと結構嬉しそう

鳥根県 中 島 英 子

気の多い蜂が牡丹の花散らす

しあわせは縁から牡丹を見る暮し

広島市 植 田 英 詩

ジュースから軽い食事と進む恋

上役が来そう口論まだ止まず

鳥取県 福 田 保 子

ため息をまぜて女の口重し

テープ切れてからは二人の旅となり

神戸市 横 山 孜 孝

批判した役もそろそろほしい年

名城を見下すようにビルが建ち

松江市 大 峠 可 動

花散りしあとは緑の身だしなみ

呼びとめて心に植えてみたい月

尼崎市 平 井 露 芳

野崎観音にて

野崎小唄だけの知識で人が寄り

野崎小唄石碑も節を付けて読み

鳥根県 山 本 文 子

クローバーをいっしょに探す人を持ち

切られてもポプラまっすぐ天にのび

鳥根県 梶 みどり

ふまれてもふまれても野の花春をしり

飼われてる悲しさ宇宙を忘れたり

竹原市 時 広 一 路

下向いて歩けば一人だけの道

子守唄眠たくないとううしぐさ

和歌山市 林

己三彦

小企業金のたまごがそつぽ向き
順調に売れて行商貸しがふえ

美容院ピカソのような顔がくる

クラス会紅一点が子ども抱き

大阪市 有

信 新之助

闘病へストロー細工までおぼえ
ピンボケのお蔭歳より若う見え

鳥取市 藤

本 佳

女

三階を建てて中年の顔が立ち

寝てしもて損したような宿を発ち

尼崎市 中

谷 利 美

和歌山県 ふきあげ

虎 城

ふみ切れぬムード女の瞳が強い
こころ吹き抜けて尾灯が去ってゆく

大臣の遺憾乍らで済まぬ事故

継ぎ当てて着せるを知らぬ嫁と住み

東大阪市 落

合 思 月

孫のような医者に注射を任せ切り

高知県 山

川 勝 子

里帰りさして銭湯へ久しぶり

七釜温泉の民宿

孫連れて来れば良かったレンジ咲き

鳥取市 両

川 洋 々

焼石に水でもやっぱリストをやり

七尾市 松

高 秀 峰

カーネーション色とりどりの愛をひめ

大阪市 影

山 啓 吉

産め産めとうませておいてから離婚

諫早市 原

田 明 春

逢えそうなそんな気がする花の山

御神木千年たった芽の出よう

京都市 藤

本 征 山

扶養家族二人へ朝の靴みがく

今治市 渡

辺 南 奉

鳥取市 河

口 忠 志

工場の煙り馴じめぬ五月空

和歌山市 増

田 次 章

新潟県 高野不二
コマーシャルちと思ひ当ることをいい

羽曳野市 飯田一治

大胆な道草をして嫁にゆき

岡山県 山田止水

閉山の煙突恥かしそうに立ち

鳥取県 大山果風

一応は反対意見きいて見る

羽曳野市 前川桂馬

病人の毒舌聞ける嬉しさよ

竹原市 小笠原不動

女部屋ヒューズ一本手間がいり

河内長野市 井上喜酔

急停車歪んだままで足ふまれ

大阪府 松岡茶々坊

出来る人一步下って物を云い

大阪府 島野大吉

ローカル線改札済の切符売る

奈良市 桑原千里

父母健在平均寿命もついて伸び

堺市 斎藤亜也

ほんとうは母だけが知ってる誕生日

米子市 増田竹馬

よかったよかった以下同文で卒業し

羽咋市 三宅ろ亭

汽車賃の上がれど旅の人多し

大阪府 河原林比呂路

延ばしても延ばしても曲る釘の意地

堺市 伏見茂美

叱るまい末は我が身を寄せる家

堺市 細川曉年

流行におくれたくない見栄を着る

和歌山県 加納花秀

知らぬ振りしているのに肩たたき

加賀市 宮永さかえ

心なさ湯ぶねの人の湯のしぶき

岡山市 谷森和風

見るだけの客とも知らず粗品くれ

愛媛県 西田柳道

選挙違反上訴上訴で赦恩令

高槻市 山田スミ子

結局は私一人だけ乗りおくれ

鳥取市 有田 鹿の子
倅せは子供に肩を叩かせる

鳥取県 鈴木 村 颯子
汚れてる野良犬同士恋をして

鳥取県 大工 静子
空家とは思えず庭には春の花も咲き

大阪府 岡本 まさひろ
子供の日だけ知っていた春の連休

大阪府 田中 多幸
連休に墓参も入れたプログラム

神戸市 来住 タカ子
いつの世も子は親の心を踏んでゆく

大阪府 西本 保夫
ぜんまいを採りにわざわざ電車賃

岡山県 片山 雅子
モンシロ蝶キャベツの葉かげにデートする

鳥取県 大工 チヨ
妬かぬようになって夫の髭も伸び

鳥取県 大森 孝華
愛情の歩巾を計る孫の知恵

竹原市 森井 菁居

世情にはうとく学者として光り

岡山県 浜口 志賀夫

生涯を回転木馬のように生き

仙台市 川村 映輝

傾むいた国宝厄介ものにされ

京都府 菊沢 破天

ひとり寝の仏壇の灯を絶やすまい

鳥取市 藤本 鎮也

悲しみを砂丘の雪に踏み捨てる

鳥取市 藤本 恵子

成績表トップの兄より先に見せ

鳥取県 藤本 泰嗣

理髪屋を泣かせる髪が流行り出し

鳥取市 藤本 和宏

街とざす雪へ童話が生れ出る

米子市 源氏 勝久

ノートしていたのでアリバイ認められ

鳥取県 不二本 和久

砂を吐くまでは蛤生かされる

鳥取市 米原 一稔

顔色で今日の結果は聞かず置く

鳥取市 福山 貴恵
ひと昔流行った形が又流行り

鳥取市 夏目 葉舟
帆立貝貝殻節を世に残し

鳥取市 谷尾 透風
身勝手な弁解聞いてからさとし

大阪府 木村 久子
働いて休むひまない身は達者

大阪府 松岡 茶々坊
CMの時だけテレビの目を離し

大阪府 今井 隼人
入学は子よりママに金子が入り

大阪府 大池 聖川
輪に成って子供は楽しむ花の下

大阪府 木村 渥水

何気なく貰った赤旗日曜版

大阪府 大池 芳
一寸した紅のよごれも疑われ

大阪府 高光 有
疑があるとみられて眠られず

大阪府 松岡 進
せっかちもパーマの時間は苦にならず

大阪府 花田 繁子
今日の仲きのうの夫婦とは見えす

大阪府 鈴木 生仏
昨日まで見上げた桜今日は踏み

大阪府 田治 一登
親切も度合がすぎて疑われ

大阪府 斎藤 三十四
免許証たまにはハンドル持てという

路郎忌句会は

七月七日(月) 午後六時から

―会場 以和貴荘―

二賞発表と同人総会は

十月十二日(日) 開催

同人総会は午後3時―句会は6時

「葉柳」及び「緑亭川柳」

岡 田 甫

本誌六月号に本田溪花坊先生のお名が見える。しばらくご無沙汰しておりますが、先生のご健在を知って嬉しく思いました。

ところで先生のご文の中に、川上日車旧蔵の柳誌「葉柳」のことが見え、現在「葉柳」誌を保存している人を聞かないとある。ですが、この柳誌は小生も所蔵しております。一昨年の暮に東京から鎌倉へ移転し、去春三月末までにやっと単行本だけは本棚に並べましたが、和本と雑誌頃は今もって整理が出来ておりません。そのため「葉柳」は十七冊揃っているかどうかは不明ですが、たしかに十冊以上は手許にある筈です。先生がおっしゃるように、大阪柳壇では草わけの貴重な柳誌で、小生も大切にしております。

また吉田水車さんの「私のメモから」の中で、緑亭川柳のことを「子規俳話」を引用されて書いておられる。よくご勉強なさっているのにはまことに敬服いたします。

水車さんは「柳翁（初代川柳のこと）」のほ

かに、緑亭川柳というのは五世川柳水谷金蔵が名乗っているだけ」と書かれています。子規のいつている安政二年版「俳人百家選」は、その五代川柳の著書であります。この和本も手許に所蔵してあります。五世川柳は緑亭川柳の名で小説を何冊も書いていますし、「××百人一首」「××百家選」というような本を何冊も出してあります。安政五年にコレラ（当時はコロリと言いました）が大流行し初代広重もこれで死にましたが、五代川柳も同様でした。ご存知のように五代川柳は佃島の魚問屋の主人でしたが、コロリが生魚から伝染するとは当時の人は知らず、自分の商売の魚でコロリと逝ったわけでした。

『通 信』

岡 田 甫

前略。

— 不二田一三夫宛 —

明文社版「百科辞典」に、川柳に関する七項目の執筆を頼まれ、十一月中旬切をやったと本日書き上げホッとしたところです。この

あと年内に出す単行本をまとめねばならず、また「国文学解釈と鑑賞」誌の十月増刊「川柳江戸名所図会」は小生の企画編集担当で、八百枚の原稿をザッと見て統一をはかり、図版の入るところを指定してやらねばならず、この二つがすむと、かねて念願にしていた「川柳東海道」の執筆にかかります。一年ぐらいですむかどうか。今夜はホッとしたところです。

過日テレビのタイトルでご尊名拝見しました。

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田 4-40-5

TEL 03 (733) 6 9 5 1

守口出張所 守口市京阪本通 2-18

三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自二月号
至五月号

路郎賞候補作品

北川 春巢

鉄カブト親父は覆面せなんだぞ
妻の愚痴いっしょにすわす換気扇
三カ日晴着に似合う顔がない
去る者を去らせば独りだけとなり
儲けには遠い仕事はあり余り
雨だれのような小言で今日暮れる
考えは変えずに名前だけを代え
板前に注文つけて喜ばせ
老犬となつて鎖が重い日々
どの党も支持せずバチンコ玉を追ひ

西尾

葉

オルゴール繰り返すのみ恋果つる
どないしてんねんやると不義理の入室じ
総理登壇もつと面をあげ給え

奈良子

鉄児
美好

無一文の頃の貴方が好きだった
鼠とりの中の鼠の眼がきれい
物思ひにかゆく枯葉落ち
冷凍えび頬すり寄せて凍つてる
蟹は横に這うからたわむれたくなり
黒白をつけて気まづいことになり
自信ないらしく葉が又変り
活けられて麦の穂実るすべもなし
みんな笑つた皆笑つたのに僕

川村 好郎

迷いきし鳩の瞳はわが愁い
足跡を残そう砂のある限り
拍手まだ案屋へ追つてくる冥利
ふと気が変り香奠止めにする
さり気なくさりげなくお茶をいれて

無理云うて水ぶっかけて不動様
右左揺れても国旗天をさす
わが坐すは弥陀の膝なり策無用

蘭幸
小松園

阿茶
公作

清子
素身郎

八郎
あいき

凡九郎

奈良子

恵二期

一三夫

いわを

水客

あいき

野迷路
アールト

しんみりと見つけるものに妻の皺
すすきとの対話愛憎さえ空し

菊沢 小松園

未練まだ名刺に元の字が抜けず
吹き溜り落葉となりしめぐりあい
人生暮色ねばつてきた誇り
文化とは馬糞に替る排気ガス
骨壺がパパでは子供臍に落ちず
補乳器で育ち乳房を振り向かず
さすがにいなれずちちは引き裂かれ
黒白をつけて気まづいことになり
鳥籠の自由になれて空を捨て
近付いて富士の素顔に裏切られ

若本 多久志

大根の宿命重石と塩に耐え
淀川の水滔々とお元日
健康な人だと靴べら知っている
木枯よ吾子の墓標よけて吹け

千翁
酔夢

柳志

奈良子

好郎

桂仙

真奇

要次

酔夢

素身郎

鬼焼

野迷路

三葉
あいき

雑巾になって汚れを絞らされ
かき船の二畳に富士の画がかかり
下積みの父をお父さんお父さん
伊予耕妻へ還るのも旅なれや
警察もやはり金庫に鍵をかけ
洩つてると知らずポンプは廻り続け

川柳塔賞候補作品

戸田古方

何げなくいっしょに洗濯してあげる
ごめんねと云えばけんかは済むものを
風上へとんちんかんな笑顔する
劣等感わく日風呂の湯溢れさせ
正体をみられても月冴えてくる
鳩の巣を残して庭の手入させ
同じ顔だのによつて写真出し
灯をつけていいよと夕日傾けり
一人逝くのに盛大な葬儀
生木裂くように完全看護です

正本水客

旧道の無縁塚から冬に入る
さつきまで尋ねあぐんだ物を踏み
謹賀新年の中にライバル意識する
劣等感わく日風呂の湯溢れさせ
春愁の昼の鼓を聞くごとし
雨だれが無理心中のように落ち

滋雀 公作 富久一 好郎 甲吉 好祐

一峯 草丘 政己 次章 晴女 可耶 輝親 綾子 千代 正朗 不二 政己 不朽 史朗

しみじみと顔を見ることない夫婦
地にふれて雪あたたかさうろたえる
灯をつけていいよと夕日傾けり
生木裂くように完全看護です

市場没食子

師の影を踏まぬどころかつるしあげ
冬眠もしたかる紙幣くたびれて
最後のアングルやはりあなたも裸体
眠いのも老化眠れぬのも老化
愛を受け入れるつもりでジーンズ
敗戦をなせ終戦と子に教え
日本人ばなれを競う美顔術
笑わせる脚本むつつり書き上げる
肯定も否定もせず笑つとく齡
老いてまだエッチな唄も出る若さ

清水白柳

こんなに倅せでいいのか長男との対話
宝石の悲哀永住権がなし
蝶つかむかそけき昇天憶いつつ
誰かきてほしい門灯つけておく
家庭教師の居眠りを起さない
透視するごとし赤子に見つめられ
ささやかに生きて針目を乱さない
冬の繩生きる疑問に突きあたり
子沢山ぎつちの箸が邪魔になり
運のいい子で東大を去年出た

克枝 可動 綾子 志賀夫 葉子 美巳代 正朗 菁居 慶彦 利美 紫也 多幸 芳子 紫美 和己 政己 孚彦 笑子 克枝 菁居 一治 千代

橘高薫風

忘れ物して来たような一人旅
浮く如く沈むが如く生きてる証し
元日のマンホールから人が出て
宝石の悲哀永住権がなし
続篇も続々篇もある絆
後進銅像の数豊かです
披露宴教師ひとりが酔わぬ人
駅長へ息子の急行通過する
手を引かれながら行末考える
病人は同じ話をあきもせず

タカ子 葉子 酔々 紫 紫 醉 伶人 征山 正朗 静子



味の伝統たれた磨

司子集柳

幡八屋鶴

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
支店・各百貨店のれん街

川柳徳川記(六)

秀忠

秀忠

二代將軍秀忠は、家康の三男である。長兄信康は、天正八年に織田、武田の義理にからまれて自殺し、次兄秀康は、秀吉の養子となり結城氏を称え越前に居たが、秀頼を庇護したので晩まれて、慶長十二年に毒殺された。結城の座元猿若と火は摺らず(一四二三)という諷刺の句が作られている。

秀忠は天正七年(一五七九)己卯の生れで、文祿四年(一五九五)に、伏見で、淀君の妹督君と結婚した。そして次のように子を生んでいる。

慶長二年 千姫 豊臣秀頼へ嫁す
同 四年 弥々 加賀中納言へ嫁す
同 五年 初姫 京極高次へ嫁す
同 六年 かつしき 越前少将へ嫁す
同 七年 長丸 三才早世
同 九年 竹千代 三代將軍家光

富士野鞍馬

同十一年 国丸 駿河大納言
同十三年 和子 後水尾皇后東福門院、明正女帝の母

この外慶長十六年別腹に幸長丸、後の保科正之があった。

千姫は、秀頼自刃の時、坂崎出羽守が救出し、貰う約束であったが、後、本多忠勝に再婚した。

坂崎は野暮おれならば手切金(一四二三)と川柳に詠まれている。

関ヶ原合戦の時秀忠は二十二才であった。家康の命で、兵を率いて中仙道を進んだが、信州上田城で、真田昌幸に阻まれて、五日もおくれて、合戦の間に合わなかった。それで家康に叱られたといわれている。

一城の上田で道をほりふさぎ(八三二)
さしもの大軍信濃だけ喰いとめる

とこれも川柳になっている。

末弟、家康の八男義直は尾張大納言、九男頼宣は紀伊大納言、十男頼房は水戸中納言とそれぞれ分家して、所謂御三家の祖である。

春日局

慶長十年(一六〇五)秀忠二十七才で將軍となり、家康は駿府へ隠居した。慶長十九、二十年の大坂冬・夏の陣には、秀忠も出陣したが、まだまだ大御所家康が実権を握っていた。大阪の淀君は妻の姉で、秀頼は娘の聲であるから、秀忠としてはまことに苦しい立場であった。しかしこれで戦国の姻親相争は終止符を打ったともいえる。

秀忠の妻は、三男国丸(国千代)を將軍世継に考えているということで、二男竹千代の乳母春日局が、伊勢参宮と称して駿府へ赴き家康に訴えた。家康は急ぎ江戸へ出て、はつきり裁きをつけた。この話は、春日局を烈婦として伝えられ、芝居にもなっている。川柳も興味を持ち多くの句が作られている。

表向き伊勢で駿河へ抜参り(五一三六)

生身ノの大神宮へ春日行き(五二二六)

お伊勢様鉄打で売る忠臣さ(二九一七)

一鉄打は齋教女性用駕(一)

春の日に抜参りする大どし(二九二五)

女にまれな鉄打で伊勢参り(二四一五)

忠義さは鉄打で行くぬけまいり(二四一三)

古来稀伊勢へ春日の抜参り(二五四二)

駿河まで行くは大きな抜参り (二三) 19

神へ忠義なお局も春日なり (八二) 31

補佐の神補佐の局も春日也 (八九) 9

—春日明神—

すくな道伊勢へ春日の局立ち (一〇六) 41

隠密を富士の麓で局いひ (三〇) 32

伊勢のはなしをきかれ局はこまり (二一) 14

するがから先をおつぼねしらぬなり (天七・一) 5

駿河から御言葉おもき御順道 (九四) 7

駿河細工で竹の世にあそばされ (一〇二) 16

川柳塔社常任理事会

六月の常任理事会が四日夕刻から本社で開かれた。

六月から発足した賛助会員制は、予想以上のご賛同を得て、「川柳塔」堅しの感が深くここにあらためて厚くお礼申しあげる。

だが、教氏の方からは是非々の意見があったことも付記しておく。内容のすべては席上で一三夫氏から報告された(ただし匿名)

ただ言えることは、故路郎先生の個人誌の感があった「川柳雑誌」から、同人制の「川柳塔」に転換して、まだ三年すこしでこれだけの陣容は成功の部ではないだろうか。欲を

お局のみやげも駿河竹細工 (六四) 18

駿府の下乗に見覚えぬ女中駕 (一六) 2

御神孫補佐の御家も春日町 (九七) 40

おつぼねのほまれ一丁名をのこし (安四九) 1

一局の屋敷跡が春日町—

名高き局禅僧に囲われる (二一六) 40

—沢庵禪師に帰依して修養—

引退

元和二年(一六二六)に大御所家康が死んだ時は、秀忠三十八才の男盛りであった。よ

言えはキリがない——と言ってしまえば發展性をさえぎるかも知れないが、同人、一般購読の方々が、よくぞ、ここまでささえてくださったと、率直に感謝の意を表してもよいのではないか。

外部から東野大八、岡田甫、富士野鞍馬諸先生をはじめ、先輩の方々のご支援も強力であり「川柳塔」はここまで伸びてきたことを共によるこびたい。

同人諸氏の熱意に、幹部諸氏もそれにこたえるべく決意のほどを示されている。

出席—生々庵、多久志、静馬、好郎、小松園、薫風、古方、文秋、柳宏子、栞、形水、一三夫、庸佑。

い家来を家康から引ついだ林羅山を幕府の儒官として朱子学を博め、戦国から泰平への契機をよく治めたといえよう。秀忠は、家康と家光との間にはさまって、凡庸守成の人のように考えられがちであるが、家光などよりもずっと人間のできた、常識的な紳士であったといわれている。

元和九年(一六二三)に、家光に將軍を譲り引退し、寛永九年(一六三二)五十四才でなくなった。台徳院という。

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋
丹精堂
を申せしむ

川柳塔社同人

天正 土谷 辻川 辻白 辻山 築山 津秋 垂井 田村 谷沢 谷垣 谷中 田中 田中 田中 田中 竹浪 竹中 竹中 竹内 高橋 高橋 高橋 高杉 田垣 高木 大工

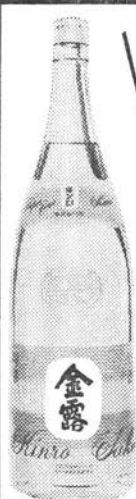
千鶴 亀喜 溪子 圭水 快夢 六井 葵水 藤波 好祐 史好 無閑 万里 十友 狂二 蛙眼 浪素 肖二 綾衣 圭三 操子 千乃 鬼燈 鬼遊 方丈 桃里 睦子

西尾青一路 西尾義一 西尾義一 西岡回天 新岡回天 二越俊爾 永松道雄 永藤弥平 長野文庫 柳生鶴丸 中島生々庵 中島小石 永尾英断 中川滋雀 中川晃男 中川淳子 中村ゆきを 中村九呂平 中筋三幸 仲どんたく 内藤幸子 内藤さき子 戸田古方 友淵貴山 都倉求女 土岐トク子 遠山可住

原野 林昌男 林夢虹 林葵丘 早川清生 浜畑胡蝶 浜野奇童 浜田久米雄 羽原光治 長谷川三司 橋本緑雨 野呂鶴汀 野村岬月 野村味平 野村太茂津 野田素身郎 野坂つき子 奴田原紅雨 西田柳宏子 西田一栄 西垣錦風 西森花村 西辻竹青 西川響二 西岡洛醉

伏見茂美 不二田三 藤岡花梢 藤井明朗 藤井二三 藤井清日 福間清夢 福田丁路 福田多可志 福島正則 福島鉄児 福井多蘭子 福井野路 弘津柳慶 平田三十郎 平田実男 平尾太希志 平井満秋 菱田代仕男 久家代仕男 樋口舟遊 馬場魚山 馬場夢生 長谷沢義英 長谷川紫光 羽佐間柳葉 原独仙

三井醉夢 満生 間島青丹子 丸川初甫 松田半月 松本吉太郎 松本美知代 松塚梁水 松川たつみ 松川杜的 松岡委滄浪 榊本落児 正本水客 前山北海 本多柳志 本多恵二朗 本多清人 本庄金三 細呂木魯木 古川麗 古川静波 古川鶴声 舟木与根一 藤原秋月 藤村メ女 藤本礎山



金露

灘を支える
灘の味

清酒

キンロ

金露酒造株式会社

室谷鉄舟 村山光輪 村上春太 村上旭童 村上峰円 三輪双楽 宮地双楽 宮口笙笑 宮川竹莊 水谷あいき 水尾陽子 光好陽子 水粉千翁 満田銀風

吉岡美房 横山富一 横倉久一 山本立見 山本素郎 山本阿茶 山内静水 保西岳詩 八木摩天 森本法泉子 森田布堂 森田茗人 森下愛論 森川すみれ

渡辺乱坊 渡辺独歩 渡辺曉童 若柳潮花 若本多志 若本あき坊 若海草春 和海草春 山田季賛 山上千太郎 若林草右 和田一乃字 吉原紅月 吉田水車 吉田圭井堂

虚栄

出原真奇選

虚栄心ばかりがさえずる同窓会
 悪病のように虚栄の虫うずき
 奥さんと呼ばれて高い方を買
 素ウドンのは売ぬか書いてないナミ
 ささやかに虚栄も張って女生
 虚栄から離縁話に飛火する
 見栄をはる母とは町へもう行か
 作文も母の虚栄に困ったり
 虚栄ある限り心から酔い切れ
 虚栄心同士かち合う七五三
 築いた庭園麦干す邪魔になり
 夜の蝶虚栄の園を舞い続け
 マンションの虚栄にえさのない小鳥
 虚栄など皆無と言えは嘘になり
 ホステスは虚栄を汚す夜を媚
 ささやかな虚栄女の足袋白
 青い鳥求めて虚栄の夢を追
 妻だけが一人虚栄の中に生
 閉山の煙突虚栄に似て淋し
 男の意地も虚栄に通じ
 虚栄の面あなたが居るからは
 虚栄には遠く尼僧庭を掃く

生甲斐はむしろ虚栄にある夫人
 虚栄には遙かに遠し母の指
 虚栄の塊り三面鏡で武装する
 着飾って見れば私が見捨てられ
 羨望を集め虚栄のネックレス
 事務服を脱げば虚栄の女なり
 舶来の時計をつけて遅れ来る
 薬指の虚栄一年分で光り
 隣まで行くのに指輪はめかえて
 親の見栄着せられ木へも登れない
 手土産に虚栄の夢を乗せて行き
 半日の虚栄に迷う貸衣裳
 御用聞き虚栄の奥を覗いて来
 御近所の手前でかさむ生活費
 弊衣破帽と云う虚栄もありまし
 家計簿の赤字へ虚栄が捨て切れ
 読めさせぬ洋書並べた応接間
 収賄の蔭に虚栄の妻が居て
 泣き言を並べ豪華な荷を持たせ
 特等で焼いても白い骨で出る
 カラットの自信で歩くハイヒル
 男の虚栄とことんまで来てしも
 虚栄心くすぐりセールス売りつ
 借金を知られとうない虚栄心
 セールスに女の虚栄狙われる

宵明 宵明 宵明 宵明 宵明 宵明 宵明 宵明 宵明 宵明
 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親 輝親
 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸 鶴丸
 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁 千翁
 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男 代仕男
 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚 木魚
 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅 章雅
 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖 無聖
 里風 里風 里風 里風 里風 里風 里風 里風 里風 里風
 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明 曉明
 いわを 千日 春日 春日 春日 春日 春日 春日 春日 春日
 思月 思月 思月 思月 思月 思月 思月 思月 思月 思月
 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝 瑞枝
 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方
 利美 利美 利美 利美 利美 利美 利美 利美 利美 利美
 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙 芳仙
 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水 扇水
 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方 古方
 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎 素身郎
 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波 藤波
 泣き出した目にハンケチのタイミ
 金がないからハンケチを贈るとし
 ハンケチでこして泥水飲んだ過去

ハンケチ

西出一栄選

ハンケチで眼鏡を拭いて向き直り
 弱点を知ってるハンケチ姿も出る
 ハンケチに合わせ小さく尻を乗
 ハンケチへ宝のように証拠品
 ハンケチはこぼした酒まで飲
 新妻は赤いハンケチ籠に結い
 無事な顔見てハンケチに嬉し泣
 中年を意識ハンケチ無地にす
 ハンケチの白へ少女の夢包み
 ハンケチの血液型が星を割り
 ハンケチを小道具にして金を借
 恥ずかしい返事ハンケチ身をよ
 すり傷へハンケチ裂いて呉れた縁
 言い訳も出来ずハンケチもむ
 ハンケチで麻酔のように船で寝
 ハンケチにデートの余韻まだ残
 泣き出した目にハンケチのタイ
 金がないからハンケチを贈るとし
 ハンケチでこして泥水飲んだ過去

ハンケチをほどきドングリにけ出る
ハンケチを貸し泣くのを手伝つてやり
終電車ハンケチ踏まれたまま残り
ハンケチは悲喜こもごもの席につ
ハンケチ一枚をいふハンケチ買
ハンケチの真白さ胸は炎えている
悲しみを捨ててにハンケチ小さ
親心をハンケチに包んで去に
背信を覆うハンケチ白すぎる
ハンケチに妻の推理のおそろしさ
何となく汽車へハンケチ振る散歩
ハンケチを噛んで艾に抵抗し
マジックの演技へハンケチ生
ハンケチを噛まず娘はすばり言
一日の汗をハンケチ吸い込んだ
ハンケチの白が悲しいご対面
佳 南 奉

ハンケチが口惜しさの通りに燃
ハンケチにくさめ包んで殺される
ハンケチの演技でお悔み申し上げ
冷やかに聞くハンケチが膝に有り
人生につかれハンケチうすよごれ
人 トク子

ハンケチを敷いて青葉に包まれる
地 虎 城

ハンケチの自負ポケットに顔を出し
天 無 聖

ハンケチを使わずに泣く意地もある
ご主人の今日をハンケチ物語る
軸 タカ子

石 鹼

弘津柳慶選

フランス製だからと石鹼高う売れ
石鹼もタオルも新の家族風呂
石鹼を呉れと湯殿で背なを向け
鯨臭の石鹼使いし頃のこと
石鹼のゆすぎが長いしまい風呂
石鹼を踏んで転んだ大浴場
石けんとタオルがお供する屋台
石鹼の使命だんだんやせるだけ
石鹼の香りほのかな頬を寄せ
手土産の石けん子らは感違い
母の日の石けん母の背を流し
千円の石鹼も同じ泡を立て
「済んだよ」と石鹼仕切り
石けんの質へうるさい妻の肌
ミツワを十個は買えるを娘が使い
石鹼の香も佳しシーツの肌ざわり
浄不浄なく石鹼は溶けてゆき
福引の夢石鹼一つで打消され
シャボン玉短かい命派手に散り

和 宏
初 甫
瑞 枝
どんたく
代仕男
輝 親
柳 子
鳥根英子
光 枝
正 朗
芳 子
熊本市英子
史 朗
南 奉
勝 久
鎮 也
無 聖
春 日
曉 風

宿替えに石鹼だけの顔つなぎ
石鹼の泡と童話で子とつかり
石鹼がいやがっているかたい髭
助産婦を湯も石鹼も置いて待ち
石鹼を三つも持って女風呂
石鹼を靴下にぬりあすを待ち
石けんの匂いのこしてすれ違い
塩分の温泉に石鹼がすねている
石鹼で洗い落した夜の秘密
石鹼でお風呂がもめる子沢山
石けんも焼芋もあり洗面器
嫁の留守嫁の石鹼少しへり
石鹼を又もねずみにしてやられ
サラの石鹼にフルの石鹼張りつ
佳 まさひろ

石鹼が野暮たい山の露天風呂
石鹼のあく間ゆっくり湯にしたり
石鹼も惚れ惚れとする肌のつや
石鹼もついでに借りて貰い風呂
石鹼を風呂場の穴へとり逃がし
人 佳 女

石鹼とタオルで気楽な一人旅
地 弘 朗

石鹼の匂いも混る湯の煙り
天 魚 山

石鹼にしとけとお得意区分され
軸 軒太楼

産湯から続いて石鹼の世話になり

利 美
葵 水
祥 月
洋 々
保 夫
洋 々
トク子
芳 朗
魚 山
止 水
宵 明
無 閑
忠 志
古 方

初歩教室

題

「愛」

本田 恵二朗

『川柳は十七音字で表現した愛情である』

これは私が私に与えた川柳の定義であり、句を生むための胎教であるが、人様にこれを押し売りしようなどとは、毛頭思っていない。と私のささやかな句集の一頁に書き添えたところ、賛成して下さったお便りを沢山に頂いたが、その反対の人もあるかも知れない。

それはそれでよいとして、温い句、ほのぼのとした句を生み続けるならば、その句主の心は段々と温いものになってゆくであろうし円満な人間形成がなされるにちがいないと私は信じている。

また愛情のにじんだ句は、それを読む人の心をもほのぼのと温いものにするであろうと思っている。

今回の課題は愛であるので、上記の意味から、大いに期待しながら一句一句を真剣に味読した。

愛に飢えた児のクレヨン黒がちび

愛の反揚目を開けたら消えそうな

紐解けば母の愛情洩れこぼれ

さりげない言葉の裏にひそむ愛

小包に母いそいそと愛を詰め

やきもちをやいてる妻の愛たしか

愛の手鍋さげて楽しい日日である

愛たしか老婆の肩もみながら

臨終のまなざし母性の愛あふれ

目にしみる青葉がくれた小さい愛

夫への愛半分を子に回し

愛情のしるしに爪跡を貰い

指切りに愛情こめた別れ道

言葉にはならぬ愛情温める

コンピュータで計り切れない親の愛

果籠りへ雄いそいそと愛運ぶ

金でなし理屈でもなし母性愛

亡き妻の愛のまなざし浮ぶ宵

二三

虎城

千代

秋女

和風

和風

破天

徹也

正直

克枝

英詩

誓二

文四

セツ

生仏

多幸

聖川

芳

転んだ子それ立て立てと愛の鞭
乳房にぶらさがる子猫なめになめ
盆栽に鯉に余生の愛みつけ
愛の巢に夢あり汗でふくらませ
愛情の谷間にも吹くみどり風
愛の果の窓の灯りはピンク色
三十年合せ続けた愛の歩調
恋成就聞くも語るも愛の歌
愛こもる母の便りの誤字あて字
胎動は素晴しきかな愛たしか
愛された記憶の中の遠火花
愛称で盃かわす日の童心
愛し合う歩幅へ鳩が慕い寄り
二十年そろそろ愛妻こわくなり
愛の電話代が高うつく筆不精

止水 綾女 軒太楼 八重子 頼次 正行 茂美 繁子 芳子 芳子 芳子 正朗 正朗 千里

喫茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場

喫茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON

心齋橋大丸・そごう東入る
TEL 271-6684

「野 良 犬」

入選発表

選 者 清 水 白 柳
 投句総数 七百五十三句
 入 選 六十八句

大 阪 小松園
 縄張りがあつて野良犬吠え立てる
 鳥 取 無 閑

押売りを野良犬時に吠えてくれ
 岡 山 止 水

野良犬の恩を忘れぬのに困り
 貝 塚 つき子

おとなしい順に野良犬捕えられ
 大 阪 小 路

野良犬の六感今朝は野犬狩り
 倉 敷 恵二朗

鍵ッ子の根気が野良犬手なづける
 鹿 見 島 トク子

野良犬と仲よく鍵っ子ママを待ち
 藤 井 寺 吸 江

野良犬が繫いだ犬に羨やまれ
 大 阪 弓 彦

新入りの野良犬シッポ下げたまま
 小 松 芳 朗

野良犬に首輪買うほど住みつかれ
 富 田 林 花 梢

野良犬も飯場の屋に坐り込み
 大 洲 曉 明

飼犬のくさり野良犬不思議がり
 平 田 代 仕 男

人影へ野良犬走る癖がつき
 堺 青 香

野良犬にたとえ根性教えられ
 高 槻 静 馬

野良犬に酔眼折詰持ち代える
 米 子 瑞 枝

野良犬へ責任のない餌を与え
 八 代 史 朗

野良犬もやるせないのか月に吠え
 笠 岡 要 次

プライドが野良犬にあり尾を振る
 大 阪 繁 子

野良犬は歩いておれば生きてゆけ

富田林 美 代
 野良犬のある日鎖が欲しくなり

大 阪 笑 痴
 野良犬にいつもの屋台今日は見ず

大 阪 阿 茶
 野良犬に吠えられ空栗一廻り

岡 山 藤 波
 野良犬のひがみ呼んでも尾を振る

和歌山 葵 水
 出合い頭野良犬の方も身構える

岡 山 秋 月
 野良犬へ住所不定の子を思い

尼 崎 利 美
 野良犬が尾行してくる夜の無気味

米 子 勝 久
 おでん食う顔を野犬に見つめられ

東大坂 肖 二
 野良犬の執念に負け飼うてやり

羽 野 野 い わ を
 雷が鳴って野良犬慌て出し

桜 井 雀 躍 子
 行く先があり野良犬朝を去る

何もせぬのに野良犬叱られる
 なつかしい匂いに野良犬つき当り

兵 庫 可 住
 野良犬の孤独へ闇が味方する

大 阪 進
 犬同士やないかと野良犬腹が立ち

野良犬に残飯やって居坐られ
 世話好きを知って野良犬来てあま

大 阪 弘 生
 野犬狩以来馴染みの犬が来ず

大 阪 慶 之 助
 拾うた子が寝てから野良犬捨てる

大 阪 水 客
 野良犬の方から道をよけてくれ

野良犬に覚えがないのにじやれつ
 野良犬の耳雨だれを聞く詩心

野良犬はうちのごみ箱あてにくる
 酔うても眼と野良犬の眼が出合う

倉 敷 克 枝
 抱かれてる犬をうさんに見る野犬

番犬の不服を野良犬が嗤う
 野良犬の我慢蹴られてもまだ拾い

倉 敷 里 風
 長い橋野良犬途中で引き返し

野良犬の夢春雨に濡れてゆき
 和歌山 虎 城

日溜りに寝る野良犬の過去を問い
 野良犬に慕われ市場籠重い

大 阪 雅 万
 野良犬の勘犬好きについてゆき

野良犬が今日も歩かず廻り道
 京都 征 山

住みついた野犬わが家の顔で居る

野良犬の眸に鍵ッ子の眼が恋し

界 天 笑

人馴れのした野良犬をもて余し

野良犬にされる遠出と知らなんだ

野良犬も青信号で渡り出し

倉 數 千 翁

野良犬が知ってる愛の勝手口

野良犬が金のくさりの夢を見る

野良犬とじゃれる鎖の長さだけ

佳 句

界 一 二 三

人と距離において野良犬尻尾振り

大 阪 柳 志

待ちぼうけ野良犬にまで怪しまれ

大 阪 章 雅

学校給食野良犬時間知っている

界 千 万 子

野良犬は身に覚えのない石を受け

界 天 笑

世話好きの軒で野良犬産気づき

人ノ句

大 阪 雅 万

ダウ新値野良犬までがよう太り

地ノ句

大 阪 痴 亭

女子寮へ野良犬定住するときめ

天ノ句

米 子 瑞 枝

いろいろな名で野良犬は餌を貰い

選者吟

しぶちんの骨は野良犬嗅いだけ

大萬川柳四十四年度 第六回

ベストテン (六月現在)

一 瑞 枝

二 天 笑

三 小 路

四 文 秋

五 柳 志

六 克 枝

七 千 代

八 鱗 魚

九 水 客

十 秋 月

十一 里 風

十二 阿 茶

十三 弘 生

十四 花 梢

十五 吸 江

十六 慶之助

十七 素身郎

十八 曉 明

十九 美 房

二〇 虎 城

二一 雀 躍 子

二二 青 香

一四、〇 米 子

一一、五 界

一一、〇 大 阪

一一、〇 大 阪

一一、〇 大 阪

一一、〇 倉 數

一一、〇 米 子

九、五 岐 阜

九、五 大 阪

八、〇 岡 山

八、〇 倉 數

七、〇 大 阪

七、〇 大 阪

七、〇 富 田 林

七、〇 藤 井 寺

六、五 大 阪

六、五 倉 數

六、五 大 洲

六、五 大 阪

六、〇 和 歌 山

六、〇 桜 井

六、〇 界

二三 小松園

二四 葵 水

二五 史 好

二六 千 翁

二七 要 次

二八 好 郎

六、〇 大 阪

五、五 和 歌 山

五、五 大 阪

五、〇 倉 數

五、〇 笠 岡

五、〇 高 石

(以下略)

昭和四十四年第八回

「午後」 五句以内

締切 七月二十日

第九回

「鮎」 五句以内

締切 八月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜
三丁目五一六

郵便番号 五九二

川 村 好 郎

大萬川柳あれこれ

「横顔」という題は「横」に限られてるだけに、意地悪い題である。

川柳的に考えて「美」を狙うのは損のような気がする。もしボクが応募するとしたら「美」は避けたいかも知れない。仕事に熱中する横顔の美しさなど、どうも共倒れのように思う。

六月の本社句会で、文秋さんが葉子さんの横顔を見て、一句モノしたが、彼女の横顔はバツグンの美を備えているものの川柳的ではない。むしろボクの愚妻など、横から見るとゼンゼン鼻が見えないから、こういうのは川柳になるかも知れない(F)

玉造川柳会 (大阪市)

時 七月十日 (木) 午後六時

題 暴力・ビヤガーデン・特別宿題 (相談)

所 玉造交差点南一〇〇米

大阪信用金庫

南大阪川柳会

時 七月二十日 (日) 午後六時

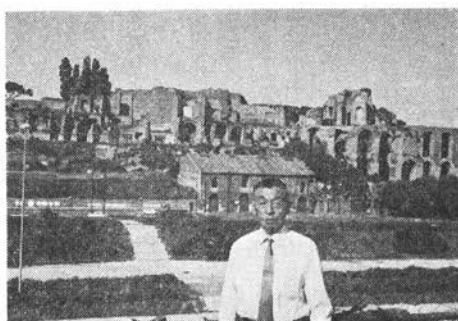
題 視界・道理・居眠り・マス

コット

所 松崎町二丁目 以和貴荘

本社句会と同じ会場です

☆ 柳 界 展 望 ☆



ローマの旧蹟の前で
若 本 多 久 志 氏
(橋 高 薫 風 担 当)

日) 午前十一時から箕面の
滝へ。深い緑の中の径の散
策に半日を楽しまれた。

▼川柳瓦版五月号は十周年
記念特集号として発行。瓦

版の会では他に「国会傍聴
と新宮殿参観」「明治村見
学と川柳を語る会」「南紀
新宮勝浦吟行と新宮時事川
柳会参加」や、瓦版手拭の
制作など種々の企画をされ
ている。

▼川柳わかくさ(大阪)市
六月号は、村雲句碑特別号
として発行。

▼奈加川第七号は創立十周
年記念号として五月一日中
川区川柳作家連盟(名古屋
市)から発行。

▼鈴木可香氏作句生活五十
年記念川柳大会は十一月十
六日正午から三菱健保会館
大広間(名古屋市中電バス
広見町下車北へ二丁)で開
催。兼題、頑固・ベレ・帽
・頓智・若返る・几帳面
・仲人・健脚・子宝、席題
三題当日発表。各題三句詠

投句は投句料百円封入の上
十一月五日までに名古屋市
西区米田町一八・長谷川鮮
山宛。

▼瀬戸内海海城城趾三鬼神
吟行は竹原川柳研究会主催
で五月下旬に開催。可笑・
愛鳩・大八洲・正光・都指
王諸氏の寄せ書を頂戴し
た。

▼直原玉青画伯指導の青玲
社展は六月三日から八日ま
で大阪梅田・阪急百貨店七
階催場で開催、中島生々庵
主幹の作品「あかつき」を
はじめ、中島小石・河村瑞
川・岸本豊平次氏ら川柳塔
関係の出品作は力作揃いで
あった。

▼大坂形水氏(大阪理事)
は六月十五日尾道で開催さ
れた高鷲垂鈍著「白黒記」
出版記念会へ。

▼西尾菜氏(八尾市・理事
は五月八、九日箱根・富
士五湖・富士五合目と強羅
一泊。五月十八、九日は松
江城・小泉八雲居・日の岬

できたての生ビール 新発売 アサヒビール 本生

レーベルの日付けは新鮮なうまさのしるしです

▼川柳岡山社創立三十周年
ますかつと誌令三百号記念
第二回全国川柳大会は昭和
四十四年六月一日午前十時
から岡山市後楽園内鶴鳴館
で開催、句作のない画期的
な会であったが出席者二百
十名が四分科会に分れて討
議、終了後約三十名の有志
が市内成田屋で懇親宴を持
った。川柳塔関係では、清
水白柳・本田恵二朗・岡村
久志良・白井三林坊・松村

万古・山内静水・高鷲垂鈍
らの諸氏と薫風が出席、柳
談交歓の花を咲かせた。
▼かきみ川柳社(岡山県)
主催の八月吟行は二日午前
十時から苫田郡上才原村白
雲閣で開催、兼題は白・雲
・冷しい・宝石・紛争。十
九平氏が担当されていた特
別課題の選者に丸山弓削平
氏が当たられる。
▼どんぐり句会(川村好郎
氏指導)吟行は六月八日(

・出雲大社と玉造温泉一泊
いずれも得意先きの招待旅
行でしたー幹事さん幹事さ
んモチてるわけなしー菜
▼藤本礎山氏(鳥取同人)
は健康をとりもどしつつあ
るが、社長として活躍の日
も近いとのこと。
▼清水白柳氏(大阪府理

事)は川柳高知の巻頭句評を六月号から執筆。

▼築山快夢起氏(ホノルル市同人)はパーキンソン症治療服薬の効あつて指先きのふるえが軽くなったが、まだまだ執筆が満足ではなく川柳塔への通信も怠りがちになっていると。

▼高木夢二郎氏(神奈川県)は一月下旬以来、入院加療の効あり四月十八日から家庭で療養を続けておられる。

▼川岡霊眼子氏(諫早同人)

は病臥中のベッドでも忙しい用務を果しておられ、五月には後醍醐天皇三十二代の末、熊沢照元氏と大村市の医学博士赤羽格氏長女赤羽隆子さんとの見合媒酌の労を取りもたれた由。

▼福田丁路氏(高槻同人)

は六月一日夫人同伴で西国一番札所青岸渡寺をはじめ熊野那智大社、名瀑那智の滝を回わり国民休暇村新勝浦荘で一泊。二日は鬼ヶ城を見物帰阪された。「風薫る那智のお山のホトトギス」

▼児島与呂志氏(大阪市同人)から、「路面電車

新同人紹介

四方 天弘美

千太郎・白柳推薦

伏見 茂美

藤井 一二三

一郎・笑痴推薦

廃による柳友全員の地下鉄への配置替え、春果川柳部長の栄転などで中断されていた「川柳大阪」も、仕事がよくやく落着いたので、復活一号を五月に発行することとなりました。

▼堀江芳子さん(島根県)

から、「正朗さんの左眼がまた疼き出し、五月三十日松江日赤病院新館六百十七号室に入院、午後手術を受けました。

二十日過ぎには退院の予定ですが、七月の路朗忌句会にはまた清泉さんに手を引いて貰って出掛ける約束をしております。

▼森田布堂氏(鳥取同人)

を訪ねられ秋芳洞を見物。帰途は国鉄の順法斗争のため列車が遅れて仕方なく米子で一泊されたと。「初夏の陽に秋芳台の石の色」

▼山田季賛氏(高槻同人)

は五月十六日建設機械展を見学。「リモコンでブル(

ブルドーザー)は玩具のよう動き」五月二十四日は尾道市竹村旅館での同窓会に出席。雨の千光寺、文学小径を徘徊。二十五日は福山城・鞆の鯛網を見物された。

▼村田瓢太氏(守口同人)

の関西奇術教室では六月十五日、松坂屋大阪店で「一日奇術教室」を開催、受講者多数を迎え大好評だった。

▼加藤貞山氏(鳥取同人)

は、鳥取駅前都市改造協議会の仕事で日夜奔走しておられるとのこと。

▼島居百酒氏(西宮同人)

の住居番号が左記の通り変更になった。西宮市松籟荘四番二八号。

▼両川洋々氏(鳥取県)

は鳥取県岩美郡岩美町大岩駅構内鉄道宿舍へ移転された。

がいた時の三回よりお会いできなかったことが今おもっても残念です。――

▼森居蒼居氏(竹原市)は第八回西条大会で毎日新聞社寄贈のカップを獲得された。

▼橘高薫風は五月の連休を家族連れで鳥取砂丘・皆生温泉・出雲大社へ。八木千代、石垣花子、林瑞枝、王紫の皆さんと初対面の挨拶を交わした。

疲労
肩こり
神経痛
食欲不振

アリナミンA



14

泣き言は税務署タコになっており 百酒
恩返し泣き言だけはかすまい 千万子
立志伝泣き言などは見当たらず 酔々
泣き言はよして明日を強く行こ 眞山
泣き言を自業自得の顔で聞き 好郎
万障繰り合わせて来て泣き言さあ 恒明

席題「新聞」

児島与呂志選

三行程新聞に載ったが自慢なり 生々庵
誤字欠字抵抗感ぬローカル紙 一三夫
ラジオ版しか読まない長女次女 恒明
家出して案内らんが気にかかり 虎声
昨日の勝利新聞でたしかめり 八重子
女まだ政治らんには遠く居り 滋雀
見出しだけ拾い勤めの靴を履く 鶴声
チェックした新聞持って論議する 滋雀
新聞を見てた姿で寝てしま 水客
新聞を敷いて夜行の足を出す 奈良子
新聞の片隅から父折れる 百酒
焼芋屋新聞紙でサービスし 肖二
増ページ新聞値上げをほめかす 滋雀
ハツ折^{ハツ折}ラッシニ^{ラッシニ}読^読ニ^ニス 水客
スポーツ新聞ごっこ置いて一人降り 生々庵
はさまれたままで朝夕夕暮れる 生々庵
スト巾という新聞が一つ消え 一三夫
載りようもあらうに女と死んで載り 新之助
新聞を敷けば招待席が出来る 白柳
スポーツ紙サツと読んでサツと捨て 誓二
新聞に人蚊か蚤のように死に 蕉風
ちっぽけな善意は新聞ちさく載せ 与呂志

兼題「天気予報」

神谷凡九郎選

にわか雨ところによって降った雨 旅風
老う母の予報も聞いて逆らわず 礎山
子の夢へも一度雲足たしかめる 花秀
子の枕天気予報に托す夢 野迷路
どっちでもよい日の天気予報ど 双葉
あてにせぬ予報と言うて何時も聞き 庸楽
ルージュ濃く天気予報を見る焦り 静歩
天気予報無視の若さを山が呼び 吸江
天気予報不安でプラン二つ組み 藤波
折りたたみ天気予報に逆らわず 百酒
雨男いて天気予報が気にかかり 花梢
天気図に一月予報の線を入れる 金三
雨雲の速さ予報が追い越され 肖二
航海の無事を祈った天気予報 天笑
レーダーも雨の気持はつかみかね 水客
母若し朝の予報を無視して発つ 一三夫
てるてる坊主予報へ抵抗する姿 一三夫
天気予報八卦位に見て暮し 失名
晴雨兼用予報を傘は信じてず 維久子
てるてる坊主つとして天気かえて 古方
今日の天気傘のことまでいうてくれ 白梅
天気予報真剣に聞く旅の朝 子方
百合咲いて天気予報をあざ笑う 千柳
天気予報気にせず帰る村祭り 一三夫
天気予報たまにあたるから楽し 一三夫
待望の雨に予報もはずむ声 生々庵
天気予報手応えのない口調 白柳
雨と言う予報出先きに傘忘れ 双葉
花が散り天気予報にも無沙汰 水菜
天気予報のいっそ逆をゆくとする 菜水

山小屋の視界は零となっていた 静歩
外れても晴れたら予報咎めない 小松園
どうせ雨やろうという折ができ 新之助
予報通りで無事に旅終わる 万助
予報雨客呼ば花火音しきり 儀一
旅の雨天天気予報が当たら過ぎ 万助
予報通り朝は晴れてた雀なく 柳宏子
雨天決行やっぱ予報気にかかり 柳宏子
お天気をとんびに聞いて旅に立ち どんたく
予報は雨灰皿の煙みだれない 水客
一七七予報の声のあじけなき 滋雀
一七七明日気がかりな母の旅 与呂志
長期予報も晴れ式の日が迫る 水客
外れてた予報資料情報コンピュータ 凡九郎

兼題「女性上位」

傍島静馬選

女性上位酒も煙草も負けていず 一栄
百円亭主やとアツプが認められ 一二三
帰るもう女性上位のハネムーン 旅風
蜜蜂をぞ覧と女房強いこと 春日
煙草代妻からもらい往て来ます 藤波
民主主義とんでもないのを上位にし 多志
現代つ女性上位へ逆らわず 柳宏子
うちの女房靴下などにたとえまじ 生々庵
女性上位世相愈々住みにくし 金三
女性上位へ益々男小そうなり 柳宏子
女性上位でもよし家さへ平和なら 肖二
強くてもやっぱあんな娘に付き行く 虎声
カマキリを笑おれない世のうつり 天笑
妻はしゃべり夫はただ聞き役 庸子
女性上位円満ですと笑うとき 庸子

女房のベースで今日も明けてくる
 小松園
 感謝料は女性が出したという別れ
 美代
 台所夫こまめに身をかわし
 維久子
 三十年敷かれっぱなしで恙がなし
 瓢太
 女性上位さりながら風呂は後
 多志
 男を男と思わず株の話しする
 水客
 上隣の女性上位を笑われず
 葵水
 上位も女性上位を笑われず
 野迷路
 女性上位浮気をされてあわて出し
 トメ子
 たでさえ強い女房に子が味方
 虎声
 女性上位テレビで悪い知恵をつけ
 栞
 女性上位などと男ずるくいる
 形水
 内幕は女性上位やなと思ひ
 庸伯
 死んでから化けて出ますと男言ひ
 鬼遊
 女性上位明治の姑がくやしがり
 つき子
 何糞と思うだけで居て男
 百水
 女性上位アンタ黙っていらつしやい
 恒明
 女性上位父の猫背の影わびし
 一三夫
 女性上位日本男子は何処へ行た
 滋雀
 友の眼にこの女房も髭があり
 小松園
 姑もはがゆい程の敷かれよう
 花梢
 女性上位女房いよいよつけ上がり
 静馬

兼題「おもわく」 戸田古方選

おもわくが外れて男声を変え
 旅風
 おもわくがあつたたとん起こさ
 野迷路
 おもわくへしばし蒸発してこまそ
 一栄
 おもわくがあるのに歩道橋が出来
 虎城
 おもわくがどっちもあって言葉待つ
 富久一
 おもわくにちよっぴり奇蹟まで加え
 葵水
 おもわくがありそな顔でいる無口
 文秋

おもわくを妻は笑い笑いきき
 栗
 おもわく問われ父の日の父
 薫風
 おもわくのないまま耳を掻いておく
 薫風
 おもわくのまだ赤い靴履ける齡
 一舟
 おもわくが違つても社長咳で済み
 あいさ
 ポーナスへ妻のおもわく聞き外らし
 誓二
 おもわくも兼ねて手頃な趣味に生き
 誓二
 一人暮のつぶやきにさするもの思ひ
 誓二
 おもわくのがめつて売場を見失ない
 静歩
 おもわくがこつとも違つた影法師
 葛城
 思惑のまごたまらぬまま寝てしまひ
 美代
 思惑ははずれそれから芽が出だし
 多志
 先回わりされて思惑にが笑ひ
 凡九郎
 まきこんで押しつぶして思惑満ち
 季贊
 おもわくを通す頑固をもて余し
 与呂志
 思惑の通りになつてゐる不安
 虎城
 おもわくにコンビニューターが邪魔にな
 水客
 風紋は砂のおもわく知つてゐる
 富久一
 いつの日か勝たんとて馬鹿で居る
 肖二
 おもわくに明け暮れしてゐる所在なさ
 天笑
 虫の良いおもわくでしした帰り道
 小松園
 おもわくの歩巾伸びたり縮んだり
 つき子
 おもわくも回り道してから忘れ
 白柳
 幼児のおもわくアイスクリームがたれ
 一三夫
 おもわくも母母なりの預金帳
 古方
 ああしてこうしてこうしてあゝあゝ

兼題「ナイフ」 正本水客選

左ききのつかうナイフは見つめられ
 旅風
 早口でナイフのようなすくい舌
 野迷路
 よく切れるナイフで鉛筆みな集め
 礎山

まますへ切れないナイフ出してやり
 美代
 ナイフの柄指に馴染んだ凹みよう
 柳宏子
 デザートコースナイフはバナナ
 栗
 鉛筆を削るゆとりが出て二浪生
 虎声
 ペーパーナイフだけあり秘書も留守
 寿子
 ナイフの面ナットと鏡の代りさせ
 古方
 消しゴムでナイフをハイクボケツ
 あいさ
 バタナイフのような男と嫌われ
 白柳
 ざるなナイフでテーパームナリ無視
 白柳
 光る程果実ナイフは切れもせず
 百水
 小包にナイフ切れないもどかしさ
 白柳
 リンゴをもナイフでむけぬ嫁が来た
 トメ子
 錆び切ったナイフにも似て老い自覚
 凡九郎
 ナイフ貸す手が強盗の真似になり
 滋雀
 ややさびてナイフ切れ味あなどられ
 恒明
 切れなくていいのバタを塗るだ
 文秋
 ナイフ持つててよかったリンゴのおま
 幸郎
 隣席へナイフも貸して長い旅
 好郎
 見くびったナイフ案外切れて傷
 貞山
 ぎつちよママのナイフがよく切
 花梢
 少年が黙してナイフ研ぐ日あり
 鬼遊
 ベーパーナイフ孤独のベージ切
 静歩
 血を吸ったナイフが並ぶガラス越し
 小松園
 ナイフ待てないのがリンゴ噛りだし
 栗
 少年のナイフが人生狂わせる
 奈良子
 無器用な人へナイフのひとり言
 天笑
 デザートのナイフで抉る青い果
 芙巳代
 ポケットのナイフで訊問ひまがいり
 百酒
 皿の音させてナイフのきこちなさ
 葛城
 愛用のナイフも並ぶ遺墨展
 奈良子
 果物ナイフ朝の心に妥協する
 水客

各地新聞

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳大阪

児島与呂志報

母の日の母はやっぱりダシにされ 春果
母の日は母に代って市場籠 鉄舟
母の日は父ちゃん小さくなつて飲み 茶々坊
母の日は旅はじめての母乗せて 笑風
マイホーム青葉も入れた設計図 孤舟
倒産の庭の青葉が目にしみる 本蔭樺
日曜の青葉ヘリユックの鈴おどる さつき
みそ汁もメーデーという朝の味 凡々
整い過ぎた顔ヘトラブルつきまとい 六童子
冗談の口から顔がまるつぶれ いさむ
天皇様御利用出来る味を占め 正則
いたずら子顔を見ながらまた続け 兎月
起立礼生徒になった五十五才 三十四
桜散ったら毛虫が目さまし 喜醉
カーネーション抱き園児はきまわり 凡智
踊るのが上手で職のない男 一の字
前向きの人生裏はのぞくまい 継之助
凡人の歩みは狭くチヨコマカし 与呂志
南大阪川柳会 金井文秋報
日曜大工おだてに乗って利用され 金三

弱点は利用されてから解り
だまってるだけで価値ある歳となり
アリバイに利用し合つて飲み仲間
タレントの人氣を使うコマーシャル
人間を金に換算事故終わる
眠ってはいても上役聞かしていた
新型の激流勸を狂わせた
上役ヘライターつけるタイミン
抜け道のように見えたおとし穴
人間で良かった恋をし酒も飲み
人間が人間の道行くむつかしさ
生き字引の知恵上役が借りに来る
上役の娘もろうつた荷の重み
空き瓶が面白いので花を分け
上役の機嫌よいと姑の氣に入られ
廢物利用うまいと姑の氣に入られ
損をして良い参考と負けおし
世話好きの上役今日も社を休み
抜け道の数字インクが違つてい
参考書もたず本屋で間に合わし
サフワイヤの地球で人間血を流し
人間の弱さでくぐる縄のれん
抜け道をよその汚職に教えられ
人間より銀行金を信じてる
窮すれば通ず抜け道探しあて
上役へ筋を通して椅子が冷え
バリケード抜け道もなく立てこも
上司からにらまれてるを自覚する
喜仙
玉造川柳会 西出一栄報
驚ろきに暫し瞳孔定まらず 柳宏子
二度三度答えぬベルの胸さわぎ 頂留子

みな眼が僕を見詰めているあせり
心中をしに行こうかとつちり屋
吹雪く夜をてつちり喰べてきた温味
窓口は多忙の僕へまだ待たせ
施主さんの払いが悪い仕事ぶり
だらだらと又あの顔が立つ祝辞
沈黙に押されじわじわ折れはじめ
オートバイの迫力若者とりはにす
迫力があるところだけの予告篇
母と娘と男をけなす身の不幸
けなされて老の徹意地をもち
二代目を継げる器量とみてけなし
けなされた方が役者が上だった
けなしでも友はその手に乗って来ず
エリートなけなせば社長むきになり
けなしてた女と式日腕を組み
世をけなす父へ貧しい灯がともし
怒りの究極後悔のしかかり
奥のある話しに負けてくる瞳
結婚と云う奥の手にひっかかり
京の店奥からおうす持つてる
貰い風呂奥まで続く通り庭
奥山の獲物わらびの太いこと
神棚の奥でネズミの子が育つ
春泥の奥を太陽追いかける
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報
一本の桜市住の庭も春立
貰い物ためつがめつ値踏みする 一
スパーで値踏みの知恵をつけて 星
華やかな色彩あふれ街も春 信
代

— 60 —

底なしの親切交に勘ぐられ
勤のよい妻で言訳はねが折れ
老夫婦いたわり合っているベンチ
配電線鯉は遠慮な泳ぎ振り
夜更けまでいたいベンチへ犬が吠え
囁きのベンチに毛虫遠慮せず
清夢

和氣川柳会(岡山県)

藤原秋月報

怠け者大器晩成型にされ
我が家の太陽ママを手古ずらせ
自動巻き怠けることをまだ知らず
太陽の位置で土工は刻を知り
迂り台太陽子供を突き落す
艸平
日照権など程遠い里に住み
一風楼
公営の賭博が本業忘れさせ
富士夫
心に太陽をと証書渡される
繁子
太陽にわが子を任せた乳母車
恭子
太陽に感謝地下足袋今日もはき
芳明
賃上げの道具にされるストライキ
梅泉
怠けものパチンコ屋では顔なじみ
溪泉
斗病に昇る朝日を信頼し
老梅
カーテンを替えて窓から春にする
知水

川柳塔社松江支部

祥月報

禁酒の願神様をまだだまし
神様に告げず離婚の印を押し
サングラス記念写真がうつとうし
近道で出世汚職の黒い影
巡歩
サングラス平和な草の色によし
酔歩
神様へすがる死なしてならぬ人
舞吉
神様はチャンと見て居る三億円
泉甫
吸入の泡へ必死の目が集い
花子
サングラス美人が浜の目を集め
瑞枝

孫が吹くシャボンに遠い夢が浮き
屋上へ神様近代ビル苦肉
神様に悲喜こもごもの願いごと
近道に祠信じる村貧し
神様に記念撮影尻を向け
おみやげを買って神様忘れて居
サングラス陽除けと別な意味があり
サングラス一層ひきたつ器量よし
手に負えなくなると神様の前に佇ち
農繁期言わず珍客無理に宿め
一色の世界に生きるサングラス
近眼かいなとサングラスじつと見る
祥月
備前川柳社
目賀芳月報

宿命の糸たち切れず夜の蝶
嫁入りの車がバックしてくれず
七桁のダイヤモンドを見てかえり
不快指数ゼロなみなみと花見酒
毒ついた母が一番泣いてくれ
毒になる酒を薬と共に飲み
毒花へ蝶々はうれしそうに舞い
石鹼で白くならない混血児
信心をして宿命に耐えて生き
宿命はかかあ天下のまま過ごし
毒茸を蹴って松茸狩不漁
評判になるをおそれ回わり道
毒見役母にまかせて無事な日々
評判になって二人のホームイン
唾という宿命を持つ子を育て
毒消しをすすめられてる二日酔い
伊久野
南海電鉄川柳会(大阪市)
辻圭水報
標識を見おとすまいと初運転
宏子

団地出来てから標識の名もかわり
標識へ夜の土工は急工事
ババ運転標識で止まりまた止まり
事故続発ただ標識をふやすだけ
標識の通り走ればうしろやかまし
近道は一方通行小癪なり
武助
和歌山短詩型文学クラブ
中筋三幸報
お茶漬は女房むすびは母の味
どの角度からかおうかにはぎりめし
握り飯折り箱の蓋もち上げる
恋の名残り舗道は光りつつ遠く
名残りつきぬ靴音闇にきざみ去る
貧乏神名残り惜んでついで来る
あげそうな腰を先客またおろし
先客の中で気易いのを見つけ
先客を消す香水をたんと振り
先客はまたもたばこに火をつけた
先客があつたので社則読んで
先客の話しトボケた顔で聞く
灰皿が二ついるよな先の客
先客は未知の客なりかたくなり
旅先きで名残りを惜しむひとが出来

どんぐり川柳会箕面吟行

六月八日、初夏の緑に包まれた大阪の奥
座敷「みのお公園」へ吟行した同会から
寄せ書きが届いた。風景はそっこのけで
葉子さんの出席をよろこぶ寄せ書きばかり
である。「猿に似た顔に箕面で出合い
けり」白柳

列車出る後の名残りは手で話す 幸子
コンピュター名残りあるに引き離し 京子
独身の名残リヤキ メシだけ作り 葵水
川柳ささやま 小島無聖報

芸能は人気の査定でからかわれ ひろし
からかわれテンボはずれた歌が出る をさむ
火遊びが愛と交って妻となり 猪村
仮面つけて人の見にくさ見て回わり 久恵
からかえば本気で立候補すると云い 枝葉
からかいて本気にしてた恋が泣き 志洪
火遊びの兎をたしなめて落葉焚く 村雨
からかってみたくなるよな今朝の紅 茂広
裏口のルートに正義倒れそう 一声
酔っぱらいでためてくぐだを巻き 初音
撈抜の目は新調へ上げおろし 近江
でためがおかしなこと実を結び 八陣
新調は国旗だけなり老夫婦 古仙
人間の仮面かなぐり捨てて夜 みのる
ひきょう者仮面つけたりはずしたり とる
三尺の店にパートをおく梅田 無聖
パートタイム主人が頼りなく映り 英断
パートたぐれば大臣室につきあたり 与志
からかいの日傘へ土工のいい裸 ゆきお
でためな奴がスポッ合格し 可住
パートタイムと小金女を強くさせ 無鬼
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
ラーメンをさもまうにコーマシヤル 勝子
コーマシヤルソング歌って歌手出世 句念坊
来客をもてなす顔は別にもち 砂丘
来客の帰ったあとのつまみ食い 百日紅
遠来の客打水して迎え 伸

顔色へ腹の黒さは現われず 忠重
顔色も見てから当てる聴診器 浪子
昼酒の顔色を消す喫茶店 たかし
親同士顔色変えた子のけんか 晴水
大阪の匂いただよう法善寺 竹莊
茶柱の縁起をかつぐ嬉しい日 たけし
ふとゆらく心は風邪の熱のせい 美知
虹がある岬遍路と口をきき 紅雨
会社なら倒産すると人事院 竹青
雪も雪気象庁面目丸つづれ 日向雨
やぶ蛇になりそうなので中座する 伊津志
自分に逆うてみても齢はとし 松風
ウィロー社句会(ハワイ) 快夢起報

台所だけを王座に妻は古い カロ女
宿命を女にかけた台所 万里歩
台所から生まれる歌です平和です 峯円
台所嫁に渡し急に老け 柳女
子沢山経済危機の台所 柳葉
台所明治時代の器具も見え 眺舟
一城の主キチンを妻守り 蒼蛇樓
台所いつつまみ食いする癖が出て 泉水
台所主婦の姿をそのままに 紅茶
台所のぞけば暮らし向きも知れ 浮草
台所毒味と言うてみんない女房 雪石
明けくれをキチンで暮らすよい女房 雪女
台所亡母の釘の利用価値 笑有
運不運一バス遅れ死をのがれ 拜山
バスの席ずり合ってるエチケット エス子
バスガイド自慢ののどはいけれど 紅溪
人生の縮図を見たりバスの中 快夢起
イロハ坂芋虫のようにバス登る あき坊

南海川柳会
時 七月十七日
題 交通マヒ・ぐち・ハレンチ
所 ナンバ高架下
親和クラブ

川柳たけはら

山内静水報

参観日自信ないのにあてられる 千代美
入学式後輩の顔興味あり 佳代子
参観日和服姿の母があり 洋子
実感がやがて涙となる式歌 浄美
母さんに逆ってごめんと詫びて 正和
先輩に歌う式歌へ涙が出 日出夫
ゲバ棒をふる大学へ親はやり 康宏
見送りへ急行サッと動き出し 勝彦
本当の友達を数える恐さ 彦彦
(以上、中・高・大生)
保護色の私をかくす色がない 扇水
握る手のぬくみに触れるもの 迷仏
鼻にしわ寄せて仕方のない笑い 泉
高めてはならぬ心よ朝の霜のり子
手遅れをとうに知ってた日記帳 こふみ
逆らしい夢から妻に助けられ 英詩
恐ろしいうしろ姿の父あわれ 松緑
正しくはないがリズムのある暮し 操
点滴の間合い命を意識する 静波
ゴシップの渦中で妻の座を守り 清太郎
結局は問いつめられてるセリフ 雅鳳
妻の鼻子の鼻同じ 低い鼻 春昇
おかっぱのいっそ女になりなはれ 一路

鏡よ鏡この世はすべて美しい
東西南北敵を承知で立つ仁王
独り言だったか一人っ子の遊び
萎れても尚カトレヤとしての見栄
あられ囁む音もわびしき旅ひと
春を呼ぶ唄をさえきる雪が舞い
一本気灰の中から見つけ出す
陽のひかりすうて両手のかけ冷える
タコ部屋を思わす寮のスキ間風
居候の形で新車居を構え
治るあてない病人に春近し
風よふけ自問自答で枝さわぐ
食いはぐれる心配はない鎖でさ
さからってしまつた悔いが寝て
冬の林道で拾つた恋に翼がない
大海に出るとも知らず藻は流れ
夢いっぱい見合い写真を見てあきす

ふじかけ短詩睡会

礎山報

鉛筆で書いた手紙の字が読めず
鉛筆を又なめくせを叱られる
字の下手を鉛筆折れたせにする
文字下手なくせに鉛筆だけそろえ
鉛筆の芯が折れてた試験場
一等の賞の鉛筆大事がり
鉛筆を持てば大きな夢生まれ
一本の鉛筆世界をえがき出し
(高校以上成人の部)
鉛筆で夢もセンチも書く少女
職人の鉛筆耳へ置き忘れ
鉛筆が二本で万年筆が買え
鉛筆を舐めて名文書くつもり

笑子 不動子 青居 鬼焼 峰泉 政己 笹舟 美佐雄 貞子 芳蘭 幸二 信二 康徳 房子 静水 光子 婦美子 勝子 末里 国子 和宏 恵子 泰嗣 佳女 透風 葉舟

思考する間の鉛筆かじられる
さらさらと鉛筆音のみ試験場
鉛筆へ目印つける子沢山
鉛筆で夢の祖母から便りが来
親の郷子の夢鉛筆削らせる
城北明朗会 川口弘生報
共白髪平和ただよう善光寺
今は亡き夫に驚ろく生き写し
女房の背中流してやるも旅
新夫婦希望の苦勞ふみしめて
貧乏も仲良く夫婦苦にならず
親子ほど違ふ夫婦に惚気られ
一坪の庭へ夫婦で汗をかき
お互いの余生いたわる夫婦箸
敬老会連れ添うて行く夫婦箸
ハンコさへ押せば他人になる夫婦
若禿で女房後妻と間違われ
公園は花より先に唄い出し
三分で行ける桜の花も見ず
酒のない下戸の花見の味気なさ
日を浴びて黒く焼けます孫子
中風も陽気がよいので散歩に出
思い出は若きあの日の湯の煙り
花見時野良犬様も大当たり
独り者猫と語るやよもぎもち
呉れるかも知れぬ隣りの餅の音
餅草を取るだけダンゴ出来もせず
湯気モウモウ美人が見えぬ混浴場
岸南柳報
駒つなぎ川柳会
万博の桜入りマーク此処彼処
桜よりだんごを好む下戸ぞろい
太郎

三分咲き五分咲き桜散る早やさ
通りぬけ桜に名師の筆のあと
さくら咲き特攻隊を想い出し
ワンダフル素直に受けし我が桜
今年こそ桜へさそおう里の親
夜桜の闇ぼつねんと易者の灯
お百度の序桜も見て帰り
金策の戻りさくらを見て帰り
止められた酒に見頃の花便り
老夫婦庭の桜へお茶を入れ
花便り飲み友達が落付かず
八重桜観られ続けて色も褪せ
桜見に備えて胃には氣を配り
御近所の桜で済まず癖がつき
白柳
関戸宗太追悼悼句会——七月十三日午後一時
小松市本銀治町正雲寺・兼題・相撲・火・
友・各題三句——会費百円。

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 3452114
夜間 4408

雅号ぶつちやけばなし (72)

こうゆう



谷 沢 好 祐

我が家には「ああ言う」も「こう言う」も居る、と女房が言う。私は一言居士の方で、子供達もその性格に影響されているらしい昭和二十九年五月、当時職場にあった「帝化川柳会」に勧誘されて入り川柳を始めた時、雅号の必要を感じた。御本人に相談も無く名付けられ、気に入ろうと入るまいと、棺桶まで担いで行く本名の他に、自主的に付ける名前が要る。そこで私は川柳で「こう言い度い!」「こう言うのだ」と云う気持ちを洒落て、好祐と自らを命名致した次第。文字はただ、自分の好む文字を当てたに過ぎません。祐は佑と同意語だそうですが、天佑を好むではありませんから念の為。

会社員四十二才

たにざわ

シックでスマートな

川 柳 塔 柳 箋

一冊六五円 送料三十五円

中島生々庵著

「川 柳 講 座」

送料共 五〇円

高鷺亜鈍著

「白 黒 記」

送料共 七百元

若本多久志著

「親ごころ・子心」

実費二〇〇円 送料六五円

若本多久志著

「老 い の 坂」

実費四五〇円 送料七〇円

橘高薫風著

「れ も ん」

送料共 五百円

八木摩天郎著

「古川柳に詠まれた

堺の人々」

送料共 七五円

(堺市南清水町三十二 新谷笑痴)

九月号発表 (7月15日締切)

川 柳 塔 (10句) 中 島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 菊 沢 小松園 選

課題吟 (各題5句以内)

「親切」 原 独 仙 選

「家」 野 呂 鶴 汀 選

「宣 伝」 浜 田 久米雄 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表 (8月15日締切)

川 柳 塔 (10句) 中 島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 菊 沢 小松園 選

課題吟 (各題5句以内)

「チャンス」 木 山 遠 二 選

「本 宅」 西 辻 竹 青 選

「歌 手」 山 内 静 水 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

・ペンペン草・

★七月といえば祭り月である。大阪の夏まつりは、六月三十日の愛染さんを皮切りに、七月三十一日の住吉さんまで、九十社に近い祭りがくりひろげられる。

★二十五日の天神祭りがクライマックスだが、夏枯れを吹っ飛ばす大阪商人のエネルギーがここで爆発する

のだ。

★「川柳雑誌」社の年中行事であった「川柳まつり」も、今は「路郎忌」とかわり、何かしめっぽい七月になってしまったようだ。

★ことしはご命日の七日が句会で、しかもはじめてのナイトである。

★霞乃先生からの生駒だよでは、最近あまりご気色が悪くない。

いつまでもお元気で、「川柳塔」を見守っていただきたい。霞乃先生の「川柳日記」は、内外からも注目され、低調気味のわれわれに警鐘の「活」を入れてくださるものとして、いつまでもつづけていただかねばならない。

★特集「路郎先生のこの一句」に霞乃先生をわずらわせたのは、この特集の意義を考えたのである。

Toray

EASY CARE / 手のかからないせんい 東レインコート レインコート

東洋レーヨン株式会社



フォトは路郎先生のありし日をしのんで、あのきびしさを身につけていきたい。

★本年第二回目の二賞の間発表をした。ここからまた新しいスターが生まれる。さあ、追い込みにかかろう。

★賛助会員制は、予期以上のご協力を得た。ここに「川柳塔愛」が、いかに強大であるかを知らされ、おもわずバンザイを叫ばずにはおられなかった。

★真夏に突入する。ご自愛ください。

(不田一三夫)

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



ば 本 条
な 日 四
大 東 京 都

高島屋

定価 百四十円 (送料六円)

半年分 八百七十円 (送料共)
一年分 千六百八十円 (送料負担)

昭和四十四年六月二十五日印刷
昭和四十四年七月一日発行

編集 大阪市南区船場仲之町二〇番地
編集者 中島 蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二

発行所 大阪市南区船場仲之町二〇番地
川柳塔社
電話 大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

黒潮おどる

紀州路へ



白浜・新宮ゆき〈なんば発時刻〉

急行きのくに2号……(毎日)……7時45分

急行きのくに5号……(毎日)……12時51分

急行きのくに10号……(毎日)……16時40分

夜行直通列車……(毎日)……22時15分

白浜ゆき〈なんば発時刻〉

急行きのくに6号……(土曜)……13時13分

●きのくに5号は座席指定券を 他の列車は座席整理をなんば駅でそれぞれ1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー